

サマザマナラブ

日居月諸

五月のよく晴れた日に、僕と薫は知り合いに招かれて山の麓にある小さな町を歩いてきた。都心から電車で三十分ほどを田んぼや川が見える抜けの良い景色に囲まれながら走り、それから峻しい山肌を望む駅に降りてまた二十分ほど歩くと、黒い瓦屋根を葺いた大きな屋敷が見えてくる。日差しが当たって萌黄に染まった山を背に居を構えている姿を、薫は歩みを止めてじつくりと眺めていた。青いジャケットにレースの付いた白いトップスが太陽の光のもとで混ざり合って、まるで青空に融けていくような印象を醸し出していた。

「本当に良いところだね、ここは」

彼女は駅に着いてからあちこちにアンテナを張り巡らしていた。耳をつんざくような雉の鳴き声、足元に寄ってくる野良猫、無邪気に駆けながら通り過ぎる子どもたち、普通なら逐一感想を述べたくなるだろうこの小さな町を構成する物たちを、薫は目を見開かせつつも黙って受け止め続けていた。そしてようやく、それらを総括するように薫はシンプルに言い放った。その中には、きっとこの家に住む家族も含まれているだろう。

家主である野田さんは僕の会社の取引先に勤める医者で、養子の恵

治は薫にとって画家の師匠に当たる。野田さんの奥さんが子供を授かるのに不向きな体質ゆえに、二人は養子縁組という形で四人の子どもを育ててきた。

四人はいずれも親を失っている。長男の恵治は十歳の時に火事で両親を亡くし、親戚である野田さんの元に身を寄せた。次男は生後間もなく、野田さんが勤める病院の玄関に置き捨てられた。長女は望まぬ妊娠のために育児が出来ない母親に代わって、二人がその身を引き受けた。三男は津波で血縁のほとんどを流された。

長女の響子が十四歳の誕生日を迎える時、初めて僕たちはこの家に招かれた。野田さんの家が養子で成り立っているのは町の人なら誰でも知っており、子どもの誕生パーティーは知り合いを呼んで賑やかに執り行われることとなっている。中学校の同級生たちが席を埋める中、倍近年の離れているはずの薫が一番ハシヤいでいたのは良く思い出せることだ。

「今日はハシヤぐにしてもほどほどにしろよ、今度は電車で寝ても起さないからな」

「わかってるって」

とは言うものの声の調子は上ずっていて、手に携えた紙袋も大きく揺れた。中にはプレゼントが入っている。今日は三男の幸太の四歳の誕生日だ。まだ幼稚園に入ったばかりの幸太に呼べる友達が少ないので、代わりに僕たちが席を埋めることとなった。

「いらつしやい、疲れてない？ やっぱり迎えに行けばよかった？」

玄関を開けると奥さんが迎えてくれ、その後ろにいる響子も二つに結った髪を軽く揺らして会釈してくれた。いえいえ、と心配がいらな
いことを示すのも程々に十五畳ほどの居間に通されると、次男の哲治
が本を読みながら紺のポロシャツと黒の七分丈パンツ姿で坐してい
て、

「三人とも山に行っちゃったよ。二人のために山菜を取るんだ、って」
と残りの家族がここにいない事を教えてくれた。

「追いかけてようよ、私、山に行きたい！」

下ろしかけた腰をすぐさま上げて、薫は早くも玄関へ向かおうとし
ていた。まだ挨拶もまともによっていないのに席を立つわけにはい
かず、

「本の話しようよ、桜井さん」

と哲治が言ってくれたのもあって、結局薫だけが山に行くことにな
った。玄関先にて大声で、行ってきます、と言うだけ言って出て行っ
た彼女の代わりに謝ったところ、奥さんは、こちらだって主人も恵治
もいないから、と許してくれて、準備が残っているからと台所へ向か
った。

「テツ兄の話なんて全然面白くないじゃん、薫さんについていけばよ
かったのに」

母親と入れ替わる形で麦茶を持ってきてくれた響子は、グラスを置
くと去り際にとげのある言葉を残していった。そりゃ馬鹿には面白
くないに決まってるだろ、という兄の声は聞こえていたのかどうか、妹

は何も答えずに足音だけを響かせていく。

「これありがどうね、面白かったよ」

と言って哲治はテーブルの下から『硝子戸の中』の文庫本を差し出
してきた。ひと月ほど前に、高校の授業で漱石をやったから他のもの
も読みたい、と言うので譲るつもりで渡してやったものだ。古本屋に
行けば簡単に買えるから、と受け取るのを断ろうとしたが、どうやら
すでに向こうも自分の本棚に入れるための本を買っていたらしい。そ
れを引っ張り出してきてあちこちに付せられた傍線やら折り目やら
を元に話を始めようとしてくるはもの、こちらとしては大学時代に
読んだ本だから筋がさっぱり思い出せなかった。

「じゃあちようどいいね、今度来る時は読んでおいてよ」

元はと言えばこちらが薦めたというのに、今となっては向こうが自
信満々に本を差し出してくる様はあべこべにも程があるな、と思いつ
つ鞆にしまいこんで、新しく用意してきた『坑夫』を、申し訳なさを
表すように丁寧に取り出した。

「漱石ってさ、一回勘当されてるんだよな」

本を受け取ったかと思うと、哲治は不意に小さく深刻そうな声色で
言い出した。裏表紙のあらすじを見つめつつも、心では別のことを考
えている様子だ。

勘当されたかどうかは微妙なところがある。漱石は生まれて間もな
く里子に出され、露店でザルに入れられている姿を哀れに思った姉に
よって拾われ、実家に戻った。ところが、今度は余所の養子になった。

そして、この養父が離婚したことでまた実家に戻ってきた。都合、親が四回変わっているが、本人が不徳を犯したわけでもないのだから、勘当という言葉は間違っているだろう。とはいえ、待遇としては確かに勘当に近い。

ただそれとは別に、哲治が勘当という言葉の意味をしつかりと捉えて使っていたかどうかは、注意すべきことだと思われた。

「実の親から愛情を受けなかったのは確かみたいだね」

「じゃあ養子のままでよかったじゃん」

と言つても養家との仲も悪かった。特に養父は籍を戻す戻さないで実家と争いになり、あまつさえ養子でなくなつてからも漱石をゆすつて金をせびる有様だったそうさ。

「……最悪な奴じゃないか」

昔は子どもは大事にされなかったから、と言いかけて哲治の境遇に思いが至った。もしかしたら、漱石に対してシンパシーを感じているのかもしれない。思い入れを抱く事自体に問題はないだろうけど、自分の境遇に引きつけて作家に接することが良いのかどうか、判断がつきかねて返答が遅れてしまった。しかし、哲治は一人で考え込んでいたので、ある程度言葉が遅れても間に合わせる事ができた。

「最悪な奴だよ。実際、漱石は自分の小説にそいつを出して悪役にしているくらいだし」

「それって、いいの？」

「昔は何でも出来たんだよ」

曖昧な答えに対して哲治は拍子抜けしたような目を向けてきた。頬は苦笑いでひきつっており、すげえな、漱石って、という感嘆を残してひとまず探求は諦めたようだ。気付くと台所の方から足音が聞こえてきて、

「何のお話？」

奥さんが顔を見せたので、漱石の話を少々、と簡単な事実だけを答えると、哲治もうなずくだけで細かい説明はしなかった。

「そうなの？ 昔は小説もよく読んでいたんだけど、今じゃすっかり忘れてるものですから、哲治の話には時々ついていけないんです。桜井さんがお相手をしてくれて助かります」

「僕もたいして変わりませんよ。結局わからないままに読み進めていたんだと気付かされる始末です」

「若い時は何でも吸収出来ますからね……ああ、桜井さんもまだ若い方でしたね」と言つて奥さんは今は無しにしてくれ、と言うように笑った。

「でも桜井さんはトリビアとかいっぱい知ってるじゃん」

「余計なことはよく覚えてるってだけだよ」

余計なことでも面白いからいいんだって、と矢鱈にフォローしてくる哲治に気後れして思わず奥さんの方を見てしまったが、こちらも微笑んだきりで視線を固めることは出来ず、仕方なしに入口に目を向けると、響子が醒めた目で居間に入ってきた。

「テツ兄は余計なことしか知ってないし、面白くもないもんね」

目つきを陰しくした兄に対して、臆する様子も見せずにベージュのスカートを整えながら畳に正坐する。背筋を正したためにやや濃いピントのカーディガンがすこしきつく映った。

「僕だって面白い話は出来ないよ」

謙遜するわけでもなく、素朴な実感として話したつもりだったが、響子はそう、と言うだけで取り合っているのかどうか、手元のグラスに口を付け始めるだけだった。

「薫さんとはどうなの？ 上手くやってる？」

何の話だか、とお返しをするようにおざなりな言い方をしたところ、だってカノジョなのについていけないっておかしくない、と追及してきた。茶化す調子でもないので響子の方へまともに目を向けると、きつい視線とかちあってしまった。

「薫さんとはいつもいるから、今更なんだろう」と哲治が助け舟を出してくれたが、

「だからってテツ兄の相手って、ねえ」

と皮肉ぶった口調で返してくる。奥さんの方をうかがうと、動揺しているわけでもなく、しかし微笑みは無くして斜向かいに坐る二人を見つめていた。

「まあ、俺は桜井さんに比べたら頭は良くないけどさ、でも別に不快にさせることなんか何もやってないぜ」

「そういう問題じゃないんだよ。薫さんを放つというテツ兄の相手するのダメなんじゃないのって話」

「だからそれは、たまには俺と喋りたい時もあるだろう、って事で」
「で、喋っていることが理屈っぽい変な話？ それが役に立つの？」

「そりゃ、お前にはわかんねえだろ」

「わかんないって言うばっかりだよ、説明できないだけなんじゃないの、結局」

言葉はともかく、口調は二人とも押し殺したような所がある。一通り口論をした挙句、お互いの意見が合わない事を悟ってこれ以上疲労したくないといった調子があった。意見自体が噛み合っていないし、単純に自分の言い分だけをぶつけて済ませたいというところがうかがえる。

「ま、いいや。桜井さん、今度来る時まで読んでおくよ」

立ち上がると、扇子で仰ぐように文庫本の表紙を顔のあたりでかざしてみせた。入口を出て少しすると、階段を上る音が聞こえてくる。しばらくは戻ってこないだろう。それを察したのか、響子の口調はきつさを増していった。

「私、やっぱり最近のテツ兄、嫌い」

ぶつけどころが遠くに行つたのに比例して、声の通りは良くなっている。最近といっても一年近くにはなるだろう、と指摘しかけたものの、茶化すつもりかと咎められそうだからやめにした。第一、今日初めて喧嘩の現場に立ち会った僕からしてみれば一年というのは長く感じられるものだけれど、十五年ほど同じ屋根の下で暮らしてきた身からすれば、一年くらいは最近と括ってしまえるのかもしれない。

「いつもこんな調子なんだ」

「うん。ていうか昨日も喧嘩したばかりだから、ちょっと引きずってる」

「ここところは、まあまあ穏やかだったのだけれど」

気付くと奥さんは少し微笑みを取り戻していた。というより、さっきだって本当は微笑みたところだった。が場に似つかわしくないので留めておいたという様子だ。

「まずまず理屈っぽくなってるってこと？」

「別に理屈っぽくなるのはいいんだけど、やたらとこつちのことを否定してくるようになった。たとえば昨日だって、夜遅くまで起きてたら桜井さんたちとまともな話できないでしょ、って言っただけなのに、どうせお前には分からないから関係ないだろ、とか言い出すし。私は単にテツ兄のために言っただけなのに……お父さんやケイ兄だったらちやんと言い返せるけど、私じやいつも喧嘩になっちゃう。それに、お父さんとケイ兄は家にほとんどいないし、お母さんは喧嘩するタイプじゃないから、ぶつかるとは結局私だけ」

奥さんの微笑みを通して響子の様子を見てみると、そのきつい口調も単純に兄を嫌っているという様子でもなく、それと付随して兄を嫌うようになった自分のことを責めているのではないか、と思えてきた。「昔は優しくかったものね、お兄ちゃん。周りの子どもは何かあるところの家に集って、お兄ちゃんを取り仕切って遊びやら何やらを計画してた。お山の大将みたいに上から命令するんじゃないって、公園で遊びた

い、とか、山で遊びたい、とか、そういうあれこれの意見を全部聞いてから、公園で遊ぶのが一番良い、ってまとめて、次は山に行く、っていう約束も決めてた。響子はそういうお兄ちゃんに一番助けられたんじゃない？」

奥さんが問いかけると、響子は少し目を背けた。

「響子が家で一人になっちゃうから、響子も加わられるような遊びを考えられないかって言いながら、皆で新しい遊びを考えてた。あの遊び、しばらく流行ったわよね。鬼を一人決めて、その子を守る側と奪い取る側に分かれる遊び」

「そうでもない……って言いきれぬわけでもない、かも」

煮え切らない態度を取るところを見ると、見立ては間違っていないようだった。

「その点、今は本を読んでいろんな考えを取り入れてる時期なんですよ。それが普段の生活で使う思考回路と大分違っているから、一本に集中するために響子のことは邪慳にしている」

「そうじゃないかしら。でも、響子としては一人にしてほしくないんじゃない？」

別にそんなわけじゃない、と否定はするものの、語調が弱いので反抗までには行き着いていない。

「変な知恵を教える身としては、一人立ちしたところで思いやりも忘れちゃいけない、って教えてやらないといけないんですかね」

「ていうか、なんでテツ兄の相手なんかするの？ 薫さんはカノジョ

でしょ？ 一人きりにしていいの？」

普通はフオローが入るべきところなのに、きつい口調が再びやってきたので面食らってしまったが、考えてみれば中学生でそんな世渡り上手な口の利き方が出来るはずもない。

「それとこれとは別だろ」

思い通り、薫については放つたらかしにしても大丈夫であるかのようになさく答える事が出来た。時にはまともに取りあわないで、相手をいなすことも重要であると教えなければいけない。

「別だけど、でも……」

「言いたい事はわかるけどさ、あいつだつて一人きりのほうが楽しそうにしてるタイプの人間だから」

無頓着というわけでもない。僕のいないところでも薫は薫であるし、彼女だつて僕がいなければ自分が保てない、なんて思つてはいないだろう。ありていに言えば束縛めいたものは僕たちの間にはないのであつて、現在の放擲を表現するには信頼というのがふさわしい言葉だ。つまり、今この場で薫の話題を出すのはどこまでつきつめても間違つてゐるし、関わるべき話でもないから、僕は引き続き素っ気なく答えた。

こうして肩透かしを食らつた形になる響子は、唇を噛んで睨み始めた。とはいえ臉には力が入りきつておらず、首もそれまでの前にのめつた体勢から、後ずさりしたように顎が上がつて見えた。

「……もういいよ、だったら私が薫さんについていく」

と言つて響子も立ち上がったしまった。行先は兄とは逆の玄関の方だ。あれが哲治との口論の末に取る態度か、と確認しつつ見届けてから、すいませんね、と奥さんに詫言を入れた。

「いえ、良いんですよ。今の子どもたちは皆頭が良いから、私なんかは、そうなの、と言うばかりでまともに相手をする事が出来ないもので。桜井さんみたいに壁になつてくれる人がいた方が良いでしょう」
そこまで言われると買ひ被りも甚だしいな、と思えたが、依然として皺を露わにしながら目を細める顔に見つめられてみると、そうしたあけすけな態度に対してはお世辞だと捉えること自体間違つてゐる気がしてくる。

「黙つて見てる方が正しい気はしますけどね。本当は子どもの問題は子どもの間だけで解決するべきなんでしょう」

そうかしら、とまた僕のことを持ち上げるような首の傾げ方をしてみせる。

「今まで、甘やかしてばかりでしたから。たぶん響子は誰かにそっぽを向かれるのを極度に嫌うんだと思うんです。でもどうしたらいいかわからないから、相手と同じ態度をとつてしまふ。私たちは、特に哲治が一番、響子のことを大切にしながら生活してきたから。こう言うのもなんだけれど、徐々に人から突き放されることに慣らしていく経験も、積ませるべきだったのではないかと」

「甘やかすことにはそういう面もあるだろうけれど、一概に悪いことばかりではないと思いますよ。むしろ外側から見たら、真つ当に育つ

てますよ、二人とも」

「桜井さんにそう言っていただけると助かります」

倍近くも年が下回っている人間の、誰にでも言える一般論にも耳を傾けてくれる。おそらく兄妹はこの養母が見せる、自分を小さく見せて相手を立てる態度のおかげでそれなりの良心を保っていられるのだらう。単なる育ての親ではない、恩人とも言うべき人がここまでへりくだって見せるのだから、そうした態度を無下にしてしまつてはこちらのメンツも形無しになってしまうというものだ。

もしくは、喧嘩してバツが悪くなつた時、こうして微笑みながら迎えてくれる人がいることで、いつもの自分を穏やかな状態の中で取り戻せるようになるのだらう。そういう役回りが出るのなら、別に首を傾げるような真似をする必要はない。にもかかわらず、この人は首を傾げてみせる。無自覚にせよ、そこには余裕のようなものが仄見えた。嫌味は全くない、ひたすらにこちらを慮ってくる余裕。自分の持つている価値のある物を、持て余しているからと惜しみなく分け与えてくれる余裕。

「そうすると、薫のことをあれこれ言ってくるのも哲治に対して抱いてる不満の転嫁みたいなものだったのかな」

「そうかもしれません。お気を悪くしたら、ごめんなさいね」

こちらは気にもしていないのに、しつかりと白髪のままだった結った髪を見せながら、頭を下げてくれる。そうした仕草を見せられては、響子の事も頭ごなしに叱ってしまったのではないか、という疑念が湧

き起こつてくるというもので、

「ちよつと追いかけてきますね、せつかくの幸太の誕生日なのに、後味が悪くなるのもいけないから」

とわだかまりをなくすために立ちあがると、そう、いつてらつしやい、と単純に見送つてくれる。その様子もまた、余裕があるものだった。

玄関を出ると変わらずに青い空が広がっていて、庭先に植わっている白いツツジに日光が当たったおかげで一瞬だけ眩しく見えた。野田さんと仲の良い向かいの家の花好きの主人は、自宅の庭のみならず町のは庭先でヒガンバナが赤く並んでいるのが見えた。裏手の方に歩いていくとまた低木が鬱蒼と茂っており、紫の芽を出しているところをみると、おそらくこれからはアジサイが咲くのだらう。

家の裏手の方にも家々が何軒か並んでいるが、それを通り抜けたら後は緑に染まった山と対面するだけになる。国道も通つてはいるがほとんど車が見えることはない。神社や農家の小屋、林業の事務所などが点在しているばかりだ。右手を見れば僕たちが乗ってきた電車が走る線路がちようど水平になる形で伸びており、山から下ってきた水で出来た川へと続いていく。そこまで視線を伸ばせば何台かの車のエンジン音が聞こえてくるものの、その他には駅や学校と言つた目立つ建物が佇んでいるばかりで、その先は太陽が当たつてやや白くかすんで

いる山にまた行き当たってしまう。

視界の広さを持って余しつつあちこちを見回しながら歩いてみると、ちょうど山道の方から数人の集まりが降りてくるのが見えた。下の方にも声を掛けている女の子がおり、それが響子だとわかれば、上にいるのが薫たちであることは確実だった。

「おい、という声がやまびこによって倍加されつつ膨らんで聞こえてきた。山道の方で手を振っている薫からの声だ。つられて、横にいる恵治に肩車された幸太の手が振られる。数キロ離れていても見えるくらいには成長したらしい。といっても、恵治の赤いジャケットと思しき服装が無ければ、なかなか気付きにくいくらいの小ささは残している。最後に野田さんが、ゆっくり、大きく腕を振ってくれた。」

「晴れてよかったですね。こんな日にお二人をお迎えできてよかった」合流すると野田さんは空を見上げながら、眼鏡越しに目を細めて言った。病院で良く見る白衣とは程遠い、黒いベストにカゴを背負った格好ではあるものの、同じ表情が晴れた空のもとでくつきりと表れたことで、一週間に一回ほど顔を合わせている人に相違ないという実感がしつかりと湧いてきた。

「こっちだつてこんな景色が広がってる時に招いてくれて、ありがとうございます！」

野田さんが晴れを呼んだかのごとく薫は返答した。

「いえ、別にこちらが用意したわけでもありませんから」

「いやいや、野田さんのおかげみたいなんです。だって野田さ

んの笑顔って晴れの日にピッタリなんですから。表情が空気の中に溶け込んで、そのエネルギーが空の方まで届いていくんだと思うんですよ」

論理が飛躍しているが、お世辞を使っているわけでもない。目の前にある野田さんの顔をしっかりと捉えながら言葉を並べているのが証拠で、これが薫にとつて当たり前の感覚なのだ。それを分かっている、というか近しい感覚で受け止めることのできる師匠の恵治は、うなずきながら聞いていた。頭の上に乗った幸太の体がそれに応じて上下的なこと、キャツキャツという喜ぶ声上がる。

「オヤジの笑ってる顔が晴れた景色を作ってるんだよな。景色がオヤジを作ってるわけじゃないんだよ」

その通り、と笑いかけた薫に対して、同様に笑みで返した恵治は、お前にもわかるか、と言つて幸太を見やった。パーマの掛かったボリュームのある髪が擦れたことにちよつと驚いてから、うん、とわかっているはずもないのだろうが、兄が視線を送ってくれることの方が嬉しいのか、すぐにうなずき返した。

「なるほど、そうですか。ならばそう言うことにしておきましょう」
そうした三人の様子を見ながら、野田さんは受け止めるように言った。

「やっぱりさ、人が風景を作れるようじゃなきゃダメなんだよな。風景が人を作るって思ったら何にも進歩しないんだよ。与えられるばかりじゃ奴隷みたいなものだろ」

「けど風景をペットみたいに従わせるってわけでもないんだよね、セインセイ」

普段から繰り返しているやり取りを確認するように薫は付け加えた。

「そう。風景と人との間に主従関係はないわけ。歴史を振り返ってみると人が傲慢になったり、風景が牙をむいたり、シーソーみたいに上下する中でそのたびにこれからは人間の時代だ、いや自然を尊重しなければいけない、みたいなグダグダの議論があったけれど、結局シンブルな答えに行きつくんだよ。これからは両方が対等な関係を歩まなければならぬ、ってね」

「つまり協調の関係というわけだね」野田さんがやんわりと口を挟んだ。

「でも完全に協調出来るわけじゃないんだよな。半分くらいは影響を及ぼしあえるけど、もう半分くらいはお互いに無関係なわけだし」

「自然と人間の関係を過大評価してはいけない！」薫が恵治の口調を真似するように言った。

「なるほど。ありのままというわけだね。人間の印象を送りこみすぎてもいけない、か」

薫と恵治は言わずもがな、野田さんは元々芸術に造詣があるから話を理解することが出来る。幸太は喋るたびに揺れ動く兄の頭のおかげで退屈することがない。すると当然、僕と響子は四人の後ろを並んで歩く格好になる。目の前のやり取りに対して呆れていることを隣の少

女に対して示すと、仲間がいたことで安心したような目配せを返してくれた。

「ああいう話、薫さんは普段もやってるの？」

「まあね」

「理解できるの？」

「全然」

「よく付き合ってられるね、ケイ兄のほうがお似合いじゃん……なんで二人は付き合い始めたの？」

と溜息を洩らすように声を掛けられたが、そもそも薫との間には付き合おうという腹積もり自体がなかった。高校の頃からの同級生だが、その頃の僕の印象は変な女子というだけで卒業まで変わることが無く、再会したのも偶然駅で鉢合わせただけだし、地元に戻ってきたはいいものの何カ月もアパートを決めることなく友達の家を渡り歩いて過ごしている薫を見かねて、僕の部屋に誘った。

「好きじゃなかったの？」

「いや。でも、それありきで付き合ってたってわけでもないってこと。

順序が逆なんだよ。普通なら好き合って一緒に暮らすんだらうけど、一緒に暮らしてから段々好きになっていった」

「何それ。よくわかんない」

でも家族もそういうもんだろ、と言いかけてやめにした。そもそも家族は両親の間に愛があって、それを軸に子を育て続ける。おまけに響子の場合は事情がねじくっていて、両親の間に愛はなかったし、母

親からも見捨てられている。

「お前と哲治が嫌い合っても一緒に居られるようなもんだよ」

「それこそ関係ないじゃん、それに私はともかく、テツ兄はきつと私の事なんて邪魔だと思ってるし……」

そんなことはない、と言ったところで耳は貸さないだろう。おそらく響子は形で示してくれないと自信を持ってない。哲治との喧嘩の原因もそうだろうし、薫との関係についてやたらと口を挟んでくるのもそのせいだろう。

「そのうちわかるよ。同じ気持ちを持ち合いながら暮らすのが理想なんだろうけど、同じ気持ちを持ち合っても一緒にいられることは出来るし、同じ気持ちを持つとうとしすぎるとかえってダメになる、ってことがさ」

「そのうちって、いつ？」

「僕と薫くらの歳になったらじゃ、遅い？」

質問に質問で返すのは意地の悪い真似だったかと、言葉に窮している響子を見て悟った。しかし、ちゃんと返答してくれる律義さは備えていて、

「……多分遅い。その頃には、私がテツ兄に追いつけなくなってると思う」

追いつけなくてもいいのに、とは思ったけれど、そこからは堂々巡りになってしまう。大体、僕は薫と反目し合っていないから暢気な口を利けるが、響子はそうではない。

「二人とも、置いていっちゃうよ」

気付くと家々が並んでいる通りに入りこんでいて、四人は五十メートルほど先を歩いており、薫が振り返って声を掛けてきた。それにつられて他の三人がこちらを向き、薫が駆け寄ってくるのを立ち止まっで見やっていた。

「何の話してたの？」

「薫には縁のない話だよ」

「あ、馬鹿にしてる」

睨みを利かそうとしているらしいが、仰向いた拍子にショートカットの前髪がなびいて額が露わになり、大きめの瞳が強調されるとむしろ上目遣いをして媚びているようにしか見えなかった。そんな表情からして、感情のもつれというものと無縁な人間であることは明らかである。

「別に馬鹿にしていって。良い意味で言ってるんだよ」

「そもそも二人が話してたことがわからないのに良い意味もなにもないよ」

「縁のない話だからわからないのは当然だって」

そう言うと、なぜか響子が隣で吹き出した。

「ちよつと、響子ちゃんも馬鹿にするの？」

違うよ、とは言うもののタイミングの悪さは補いきれない。矛先を変えた薫を宥めつつ、響子は咎めるような目つきをこちらに向けてきた。そこで、薫をあしらう口調が哲治と似ていたのだと気付いた。パ

ロディめいたものを演じているのだと勘違いしたらしい。こうなると話はややこしくなり、いちいち説明するのも面倒になるから、自ずと二人で真相を隠すように示し合わせている格好になる。

「あんまり薫をいじめるなよ、ただでさえガキなのにムキになって一層ガキみたいになって手がつけられなくなるんだからな」

「ガキじゃないよ、れっきとした大人だよ！」

諫めるつもりがあるのだからわからない恵治のせいで一層事態はややこしくなる。

「薫ちゃん、僕もガキだよ、同じだね」幸太さえも言葉の意味をつかめないままに声を発すると、

「薫さんは大人でありながら子どものような活発さがあるところが魅力なんですよ。一概にご自身を否定するのもいけません」

野田さんが宥めるような表情を浮かべながら、しかし明らかにからかうつもりという言葉を掛ける。怒りをぶつけるべき方向があちこちにばらけたことで処理しきれなくなったのか、いいよ、もう、と薫はこれ見よがしな溜息をついて黙り込み、集団から離れて一人で先を行ってしまった。

「そこがガキなんだっての」

数歩先まで聞こえないように小声で恵治が言うと、苦笑が広がった。が、その中で唯一、響子だけが薫の背中をぼんやりとした表情で眺めやっていた。どうした、と声を掛けると、我に返るために一呼吸置いてからこちらを向いて、

「私ってああいう風な態度取ってたんだな、って思ってた……」

「反省したってわけか」

「うん……でもさ、話をしようとしただけなのに、お前にはわからない、って言い方はやっぱり酷いよね」

そうだな、という返事は我ながら気持ちが悪くもっていかない軽い口調になってしまい、響子に溜息をつかせた。

薫が角を曲がって、一旦姿を消す。しかし、こちらも後を追って角を曲がると、背中がちゃんと捉えられる距離にいる。視線を伸ばした先には瓦葺の屋敷が見えてきた。

玄関をまたぐと居間の方から、おかえりなさい、という奥さんの声が聞こえた。それから先に帰っていた薫の声も、聞えよがしに屋敷に響きわたる始める。帰り道で起こったことを逐一話しているらしい。哲治はまだ二階の部屋にこもったきりであるのだろうか、二人きりで向かい合って話しているようだ。

野田さんと響子は居間に向かい、僕は残りの二人の後に従って恵治の部屋に向かった。玄関から左に曲がり、縁側から差し込む光を浴びながら、居間を過ぎた頃に、

「幸太、新しい絵、兄ちゃんに見せてくれないか？」

聞えよがしの声がよく反響する。一瞬だけ薫の話が止まった。

「うん、いいよ」

と言うと幸太は小走りに駆けだし、八畳ほどの物置を挟んだ先にあ

る襖を開けた。恵治は都心にあるアトリエを拠点としているため、普段この部屋は幸太の遊び場となっているという。初めの頃はおもちゃが散乱していたが、使い古した画材が棚にあるのを見つけると、それを使って絵を描き始めたのだそうだ。

「おっ、良く描けてるじゃないか」

「良くかけてるー」

もともと、幸太が描いているのはヒーローだとか家族だとかの絵ではない。恵治が学生時代に買った画集、とくに抽象画の模写をやっているのだ。もちろん、模写をするだけのテクニクが身につけているはずもないから、完成図を見せられたところで、それこそ子どもの落書きと大差はない。実際に今回はアンリ・マティスというフランスの画家の『赤いスタジオ』を横目に描いたというものの、元の絵は複数の色を一見猥雑に、それでいながらしっかりと境目をつけながら描いているのに対して、幼い筆が仕上げたのは無数の色が境目なしに入り混じっている、アクションペインティングに近いような代物だった。「なに言ってるんだよ、ちゃんと元の絵どおりに描いてるっての」それでも恵治のお眼鏡には適うものらしい。「境目をしっかりとくべきだなんて傲慢だね。本当はこんな風に色と色は混ざり合うべきなんだよ。マティスはそれを実現した画家なんだから、むしろこっちの方が正しい模写なわけ」

薫に比べれば理論に基づいているから意見自体は理解出来なくもないのだが、もう一度見てみる、と言われて差し出された、赤やら緑

やらオレンジやらが混ざり合って名状しがたい色をした（元の絵から察すれば）壺と思しきものや、椅子と額縁がお互いを浸食し合って出来上がってしまった奇妙なオブジェを見てみると、納得は出来ない。

「これだから芸術のセンスがないやつは」

両手を肩の上で仰向かせ、恵治は呆れのポーズを取る。幸太もそれを真似するものの、むしろバンザイをしているようにしか見えなかった。

「単純に原典を尊重するだけじゃ一向に進歩がないんだっての。浸食なんだよ、浸食。原典が自分の中に食い込んでくる感触があつて、それに対する抵抗を描いてこそなんだ、芸術ってのは。猿真似するだけじゃダメなんだ」

力説する兄の横で一向にバンザイをやめない弟の様子を見ていると、たとえ正当性のある意見だろうと説得力がなければ意味を為さないのだとわかる。

「芸術は鬭争ってことか」以前恵治から聞いた話をそのままに繰り返すと、

「然り。何もかもが鬭争だ。線と線、色と色、画家と作品、作品と鑑賞者、それぞれが鬭い合って芸術は成り立つ。そこには区分けなんてない」

「区分けしたがる奴は権力者の手先だ！」

話される言葉に似つかわしくもない幼い声が聞こえてきたかと思うと、いつの間にか部屋に入ってきていた薫が幸太を持ちあげて、彼の

小さな右腕を振り上げさせていた。

「だよ、幸太？」

笑いかけてくる幼い笑みに対して、幼い笑みが返される。当然幸太には、向こうが笑っているのだからこちらも笑いで返すくらいの考えしかないのだろう。

「わかる奴にはわかるんだよ」

恵治はこちらを見ながら誇らしげに言ってくる。そんな選民思想めいた言葉こそ分けというやつなのではないかと思えたが、馬鹿らしくて応答する気さえ出てこなかった。

「でも、ここの緑はもうちよつと浮き出た方がいいよね。これじゃ他の色に埋まってるからかえって目立つちゃうよ」

「ああ、そうだな。いつそ緑じゃなくて青を使った方がいいかもしれない」

机に乗った幸太の絵をまじまじと見つめる薫に、先程までのふてくされた様子はない。居間の方で上手くなだめすかされたのもあるだろうが、なにより幸太の絵によって帰り道のことを忘れたのだろう。

「よし、お手本を見せてあげよう」

薫は幸太を膝に乗せて机に坐ったかと思うと画用紙を取りだし、マティスの絵の載ったページを片手でおさえながら、あちこちに散らばっていた絵具をパレットに絞りだし始めた。大方、言っている事とは逆に自己流の絵が出来るのだろう。

「とんだ英才教育だな」と僕が言うと、

「いいんじゃないの。習うより慣れる、ってやつさ」

と恵治が返してくる。薫に教える才能がないことは共通認識である。「それよりさ、幸太にかまけるのもいいけど、上の兄妹の相手もしてやれよ」

「なにが？」

とぼけた顔を向けてきた。しかし、この兄だって弟たちが反目していることは踏まえているのだ。

「私はテツくんも響子ちゃんも好きだよ？」

「だってさ」

薫には幸太のお守りを任せることにして、僕たちは部屋から出て縁側へと向かい、庭へと降りた。ちょうど南に面した視界からは傾き始めた太陽が見え、庭に植わった常緑樹の影がその背丈の半分ほどに長く伸びている。

「あいつらの喧嘩なんて関わり合ってたって面白くないって言っただろ」

赤いカットソーのジャケットが光を反射して、緑に囲まれた中で一層大柄な体を目立たせている。恵治がそう言っているのには、人間の難しさだからじきに解消される、と高をくくっているわけではない。単純に自分にとって邪魔な話であるから、視界から取り除いておきたいのである。

「そうは言うけど、この調子だと哲治が変な方向に行きかねないぞ。」

ブレイキ役が必要なんだよ」

「お前がやればいいだろ。実際あれこれ教えてるんだから」

言い分としては間違っていないが、血がつながっていないとはいえず、弟を余所の人間に任せて平然としているというのは呆れかえるべきことに違いはないだろう。

「ありやあな、余計なことを考えすぎなんだよ。昔から他人を気にして自分のことみたいに悩んでやがる。今だって小説を読んであれこれ悩んでるんだろ？」

そう言えるからには、弟を嫌っているわけではない。

「他人の事なんて考えたつてしようがないんだよ。考えるのは自分にとって有益である時だけでいい。ひたすら自己肯定あるのみだね」

ただ、面倒をみるという観念が著しく欠けているのだ。人は勝手に育つて勝手に生きていく、というのを地で行く男だから、周りが茶々を入れるのは本人にとって妨げにしかならない、と思っっているのだらう。

比較的面倒をよく見ている薫に対しても、基本線は変わらない。本人の意思を尊重する、と言えば聞こえはいいが、彼女のように元々教育を受ける必要のない悩みの薄い人間は、ただ褒めるだけで勝手に伸びていく。面倒を感じさせないから面倒をみる、というくらいの考えしか持っていないのだ。

「小説を読んでこの作者って勘当されたんだよな、とか言い出すんだよ。今はこの家に不満があるわけじゃないだろうけど、段々感化され

すぎて変なこと考え出すんじゃないかってさ」

「変なことつて？」

「俺はなんで昔の親に捨てられたのか、とか思い始める」

「阿呆らしいね。今ある現実を見ないで過去ばかりに目を向ける。オヤジやオフクロに対する冒涇だよ」

今の家に大事に扱われているのは事実だけど、一度親から見離されて病院の玄関に置き捨てられたことも事実である。妄想ならともかく、事実は揺るがしようにがないから双方のギャップに苦しむ。おそらく、哲治はこうした問題に突き当たるかもしれない。恵治の言葉はそれに対する確かな解答だ。けれど、そんなに単純に割り切っているのだからうか。

「大体だな、過去を重要視するのは権力者に屈服することと変わりないんだよ。基本的に人間は動物と一緒に過去の事は一切考えなかったけれどそれじゃ権力者にとって都合が悪かったから、過去って概念が導入されたんだ」

「確かにニーチェはそんなこと言ってたけどさ」というより、いつも恵治の口からニーチェを引きながら出てくる言葉だ。

「過去に対して負い目を持つってのは過去に対して負債を持つことであって、負債を担がされてるんだよ。それをすんなりと受け入れて腰を曲げるのは奴隷の態度なわけ。痛みに対して従順になる。飼いだ」と何にも変わりやしない」

「犬は躰で過去っていう観念が出来上がるもんな」この種の意見に対

して茶々を入れると、機嫌が悪くなるから話を戻すわけにはいかない。「文字っていうツールが使われ続けるにつれて知的階級の専有物になったのもさもありなん、つてとこだな。権力者は過去を書きとめるツールの効力を見抜いてたんだよ。その上手さに感服するのは結構。だが、感服するあまり従属しちゃうならない」

「要するに、哲治が陥っているのも文字への従属、権力者に対する従属ってことか」

そういうこと、と話のオチがついたことに満足しながら言いきった。短絡にも程がある。とはいえ、この芸術家肌の男がこういう性格になるにもそれなりの経緯はあったらしい。

そもそも恵治の専門は具象画だ。それも極めてリアリティのある、線の一本一本にまでこだわった、あたかもそこに物が実在しているかのような感覚を呼び覚ます絵を描くのである。人間ならば人間、動物ならば動物、自然ならば自然、それぞれが確かな輪郭を持って目の前に居る。それは写真のようなものではない。写真は目の前に居るような感覚は呼び覚まさない。写像と鑑賞者の間には境目があって、こちらがリアルでありあちらがフィクションであるとわきまえられる。しかし、恵治の絵はそうした境目を崩すのだ。

早くから恵治は境目を崩す技法を体得していた。彼曰く、人がそこに存在する原動力を探り当てさえすればそうした絵は簡単に描けるのだそう。もちろん、それを実際に形にするには相当な労力があるのだが、労力を使いさえすれば描けるものは簡単に他ならない、と言

つてのける。

そんな恵治にも躰くことはあったらしい。現実には存在する物を描き続ける中で、万物を存在せしめる何か、つまり普遍的な原動力そのものを把握できた「と思いついていた」時期があった。段々、彼は現実を描くことから離れ、非現実的なものをあたかも実際にあるかのように描く方向へシフトしていく。たとえば、触角から関節に至るまで無数の靴で構成されたムカデ、骨だけで出来たビルなど、現実の素材をそのままに活かしているがために本当に実在するかのような錯覚をもたらす絵が何枚も出来上がった。が、ある時途端にそれをやめて、また現実の方へと戻っていつてしまう。

決して歓迎されなかったからではない。むしろ現実を素材にしていたころよりもスポンサーからは個展の依頼が数多く舞い込み、メディアからは特集を企画されたこともあった。

プライベートでトラブルがあったわけでもない。アトリエを兼ねた事務所には薫を始めとした画家の見習いが多く出入りし、外に出れば画家仲間のみならず他分野のエキスパートとも幅広い交友を持っているが、本人の言葉通り自分に利益をもたらさず人間としか交流をもたないため、そこではトラブルというものが起こらないように出来ている。

把握しかけていた普遍的な原動力そのものが彼の手からすり抜けたからでもない。仮にそうだとすれば、依然として現実を（彼の言葉で言えば）抉り取るように描いている事の説明がつかない。何より、

闘争だの革命だのといった血なまぐさいフレーズを普段から使い続けている人間が、自分の手から離れていくものに対して指をくわえて見届けるような態度を取るだろうか？

恵治はただ一言だけで理由を説明している。普遍的な原動力なんてありはしなかった、と。物を存在せしめている原動力は、一個体につき一つであって決して共通のものがあるわけではない。その辺を見落としていたからやめた、というのが弟子の薫を通じて知った話だ。

「お前も文字に支配されているタイプの人間だよな。読書の効果は否定しない。しないが、そればかりになったらおしまいだね。文字は視野を狭窄にするんだよ。人間の視界はもっと広いんだ。それを台無しにするなかれ、ってところさ」

結局、弟に対する態度も芸術に対する態度となら変わりないのだろう。一個人の悩みは一個人自身が解決するしか方法はない。その点、僕が響子に対して自ずと悩みは解決される、と言っていたのに等しい。それにしたって、芸術的な態度は現実への注視によって成り立っているのだから、弟に対しても目を掛けてしかるべきだとは思っているのだが。

「大体お前はどうかんだよ。他人を気に掛けてられるほどの余裕があるのか？」

「さあ？」

「それだよ、そういうすつとぼけた態度こそブルジョワ的余裕だね」
あらかじめ用意していたセリフのようにスラスラと言ってみせな

がら、右頬だけを釣り上げつつ、皮肉ぶった笑みを向けてくる。

「お前こそテツの心配をするくらいだったら薫の面倒を見るよ。テツの悩みなんて一過性だが、あいつは二十も半ばになってもあの通りだ」

と、顎を使い部屋の方を示してみせる。た

「こつちに付き合ってるほうがずっと面白いし、いつまで経っても飽きないさ」

またも口の端だけで笑って見せる辺り、やはり皮肉を使っているつもりらしい。

「それが分かっているからこそ付き合ってるつもりなんだけどな」半ば冗談に言ったところ、

「どうだか」と視線を家のほうへずらしながらあざけるように返された。「ま、お前が分かっているって言うんならそれでいいさ」

恵治は縁側への石段を登り始めた。煮え切らない切り上げ方ではあったけれど、これ以上話していても仕方のない事だ。太陽を背にしたことで残照が目を覆ったので、僕たちは眉の力が抜けてから襖を開けると、そこにはすぐさま顔を向けてくる薫が待っていた。

「あつ、ちようどよかった。今出来たところだよ」

薫の膝の上に立ち、机に前のめりになって肘を乗せている幸太は彼女の手元に置かれた画用紙をまじまじと見つめていた。遠目からは赤を基調とした、元の絵通りの出来栄であるかに思われた。しかし、紙の両端を持って、じゃん、とこちらに差し出されると、赤以外

の色は全く合っておらず、壺などのオブジェの配列もバラバラ、到底、元の絵とは似ても似つかない。それこそ、臍脂に近い赤が印象的に使われていること以外は。

「なるほどね、自分でフレームを作ったのか」

それでも恵治にはアレンジとして受け入れられるらしく、指で紙面をなぞりながら絵を見つめている。確かに、絵の縁には黒と白で塗られた額縁を模したと思しき装飾が施されている。

「ずっとこの絵にフレームが描かれてないのが不思議だったんだよね。スタジオに飾られた絵にはフレームが嵌められてるし、フレームそのものだってあるのに、なんでこの絵自体にはフレームがないんだろう？」

「いや、そこまでやったら狙い過ぎだろ。俺なら買わないね。あくまで遊びの範疇で許される話さ」

どうやらこの二人にとって色が違っていたり、オブジェの配列が違っているようなことは瑣末な問題らしい。もしかしたら、恵治の手元で広げられた画用紙に向かって、顎を釣りあげながら精いっぱい視線を送ろうとする幸太にとっても、関心は他の所にあるのかもしれない。

「お前は どう思うよ？」

先程芸術的なセンスがないと指弾したくせに、恵治は明らかに僕をからかうために、赤さだけが原典に忠実な代物を渡してくる。瑣末な問題に口出しをするのは素人ゆえの間違いなのではないかと思われ、かといって勝手に付せられた額縁についても額全体に及ぼす影響な

ど図りようがない。単純に、唯一の共通項である赤にしか目が行かなかった。

「原典通りの印象的な赤なんじゃないか」

「おっ、そう言ってくれると嬉しいな」

苦し紛れの感想に対して笑みを向けられるとは思っていなかったので、面食らってしまった。

「でもマティスの赤って本当に難しいんだよね。画面に配列された色彩の全部が赤に向かって寄り添ってるんだ。でも赤があれこれ命令してるってわけでもなくてさ、皆が赤を助けようとしているんだよね。きっと他の色は赤がなくても存在していけるんだけど、赤だけそうじゃなくて、画面が全部赤だったらこんなものは使えないって二度とパレットでは作られないと思う。他の色はそれじゃまずいし、そんなことを許したらその内自分たちも使われないようになるかと察知したから、赤を助けようとしたわけ。脇役に収まっても、それくらいで自分たちの魅力がなくなるわけじゃないってわかってたから。そう言う事をしていればまわりまわって主役になれるとわかってたから。それを理解した時、他の色は本当の意味で主役になれるんだよ。」

マティスはそんな色どうしの連帯を感じとってたんだろね。ていうかマティス自身が赤だったんだよ。そういうことを理解しないと、本当の意味での再現なんて出来ない」

あれこれ言葉を尽くしながら話してくれてはいるが、最早ついていけない話ではなく、薫が画面に目を落している隙に視線を反らして助け

を求めると、横では恵治が苦笑を浮かべながら首を振っていた。何もわかってないじゃないか、といった具合に。

そうした身ぶりに嫌気がさして視線を戻すと、薫の話はまだ続いている。となれば、自然と視線は降りていって、膝の上に坐っている幸太へと移っていくのだが、こちらはこちらで何も言わず、口をすぼめて目を丸くして僕の事を見つめていた。

「ちよつといいかしら？」

部屋の入り口から声が聞こえたかと思うと、奥さんが立っており、おかげで視線の行き所が確保された。

「カステラを出しているんですが、いかが？」

カステラ、と真つ先に反応したのは幸太だった。つられて薫も幼い体を抱き上げて入口へと駆けていく。先程まで熱心に語っていたマテイスの模写は机の上に放り出されてしまった。

「ありがとうございます、いただきます！」

礼だけはしっかりと述べて居間へと続く廊下を小走りに渡っている。恵治は肩をすくめて、奥さんは微笑みながらそうした様子を見ていた。

遅れて居間に入ると薫は響子の横に、幸太は野田さんの膝に坐っていた。やはり、哲治はいない。

「今から声を掛けようと思っていたんですけど」

奥さんが天井を見上げた。口元が結ばれていて、眉根がややきつく寄せられている。どうやら、階段を上るからにはそれなりの配慮を用

意しておく必要があるらしい。

「ペンキヨウしてるんだらうから、邪魔しないでいいんじゃない？」

響子は相変わらず尖った言葉を使う。特にペンキヨウ、の辺りが強調されて、押掬がこもっている。野田さんや奥さんがその様子を苦笑しつつ見ている辺り、いつも使っている押掬らしい。

「ドツボに嵌るだけの勉強なんてやっても何の意味もねえよ」押掬を重ねる恵治に対し、

「おいしいのに勿体ないなあ。いまずぐ降りてこないとなくなるよ」

カステラを頬張る薫は、まるで他人が搔つ攫ってしまうような言い方をする。野田さんの方を見たが、小分けにしたカステラを更にちまちまと口に入れる幸太を膝に乗せながら、その世話をしていた。

「僕が行きますよ。ちようど話すこともありますし」

玄関から真つ直ぐ伸びた廊下を渡り、突き当たって分かれ道になっているところを右に曲がると、左手には台所が見え、右手には階段が架けられている。木で出来てはいるが補修がしっかりしているためか、足音だけが小気味よく響いた。改めて耳を傾けてみると、音がよく通る屋敷だ。居間の会話も、内容はともかく声の色分けはちゃんと出来る。

上り終えるとまたも道は分かれていて、右に行った先には響子の部屋が、真つ直ぐに行った先には哲治の部屋がある。窓から見える太陽は庇を掠めた位置に陣取っており、廊下には影が長く降りるようにな

っていた。

「哲治、カステラだつてさ」

襖を軽く叩くと、ああ、入っていいよ、と返事が聞こえた。開けると、この年代の割には整理された部屋の景色が広がった。畳が敷き詰められた左手には本棚があり、以前入った時は漫画が半分ほど、教科書がその半分、残りは活字といったところだった。が、今や半分ほどが文庫本やハードカバーによって占められている。右手には机が置かれ、宿題を終えたのか、それともこれから取りかかるのか、何冊かの教科書とノートが乗せられている。それらが入口から正面に見える窓からの光に照らされて、どこに何があるかという標識をしっかりと表していた。

窓に対して並行に布団が敷いてあって、哲治は寝転がって文庫本を読んでいる。

「サンキュー、ちょっと降りづらかったんだよね」

カステラを受け取ると早速頬張っていく。

「こっちも逃げてきたようなもんだよ」

「何かあったの？」

「他人の事を気にしない人間の相手をするのは大変だなんて」

「ああ、ケイ兄か……」

それに薫も加えられるのだけど、当面の賛同を取り付けるには持ち出す必要のない話だった。

「でも、ケイ兄は才能があるから勝手に人が寄って来るんだよな。結

局、才能が無い奴は他人のことを気になきゃ生きていけないんだよ」

「じゃあ僕は才能がないんだな」

そんなことは言っていないって、と哲治は笑いながらカステラを食べていた掌を振った。

「他人を気にかけるならそれでいいじゃん。でも、最悪なのは才能が無いのに他人を気につけない奴」

「たとえば？」

「たとえば」と繰り返して哲治は少し迷った。「子どもを捨てる奴とか」

一度迷ってから言葉を発したおかげか、しっかりとこちらの顔を見つめてくる。

「まあ、子どもを捨てた方にも、事情はあったのかもしれないけれど」とかと思うと、視線を下げてしまった。こちらとしても返答に窮してしまう。哲治の視線は布団の上を泳いで、どうにか漱石に向かって固まったらしい。

「その事情に、興味はあるのか？」

「興味」とまた繰り返す。今度は受け取り損ねた言葉を取り戻すように、慎重な声色でもって繰り返された。「元の親の事は、よくわからない。でも、俺みたいに産んだ親が育ての親じゃないって奴には、興味がある」

「それが漱石なのか」

「漱石だけじゃないけどね。こないだ眠れないからスマホでテレビ見てたんだよ。そしたら、里子が特集されてて、育ての親が本当の親じゃないってことを滅茶苦茶気に病んでる奴だったんだ。里親は良い人そうだったのにさ、きつと捨てた親にも事情があった、だから自分はその人を後悔させないために幸せに生きなきゃいけないって言い続けるの。結局は学校の友達に里子だってカミングアウトして、それがなんだって言われて、別に無理して元の親にこだわって幸せにならなくても良いんだ、って気付くんだけけど」

「なんか、まとまってる話だな」

決して哲治の話し方のせいではない。むしろ、テレビの場面を逐一メモし、それをそのまま繰り返すように話している。ならば、元からそのドキュメンタリーがまとまっていただけの話なのだ。

「うん、まとまってた。実際、最後にそいつのインタビューでシメたんだけどさ、無理して言わされたように見えたんだよ。自分の幸せと親の幸せは関係がない、だったら、自分が幸せだったとしても元の親が不幸なままなのは変わってないんじゃないか、ってことに気付いたみたいに、いちいち言葉に詰まってた」

「たとえ幸福だったとしてもそれはそれで引つかかるよな。子どもを捨てて幸福ってなんだよ、って話になるし」

「子どもを捨てたら幸福でいられないっていうのも可哀想じゃん」

「結論が出ないね」

哲治は、いや、と言って少し間を置いた。

「結論なんか出なくても良いんじゃないのかな。結論が出ちゃったら、どっかに不幸な人が出るんだと思うよ」

「随分と上手い事いうな」

「いや、今のは漱石をパクった」

と言って、哲治は手元の文庫本をかざした。確かに『坑夫』にはそんなことが書いてあった。まとまっているのは体くらしいもので、心はいたってバラバラなものであり、それを無理にまとめようとすると矛盾が生じる、だったか。

「でも、漱石はそれなりに真つ当な人生を送れたからそんなこと言えるんだろうな。バラバラになっても、どうせ勝手にまとまるってわかってるから、そんなことが言えるんだよ。実際、『坑夫』の主人公って、家出してるけど元は金持ちだったじゃん。でもって、最悪自殺してもいいと考えてた。自殺すれば、体は残るだろ？ とりあえず自分が自分として死ねたっていう事実は残る。それだけでも十分だし、家を出るまではそこそこ幸せに暮らせたから悔いなんてなかったんだよ。俺が漱石を読んでも、そういうところが俺と同じだから。要するに、余裕があるんだよ。余裕がない人間が聞いたら、親に捨てられた子どもが聞いたら、ふざけるなって言うだろうね。まとまりたくて仕方ないんだよ、本当は。まとまった体に生まれたからにはまとまった人生を送りたいんだよ。結論が欲しいんだよって」

そこで哲治は一息ついた。それこそ、結論が出てひとまず安心したとでも言うかのように。それから思い出したように、ああ、と口を開

いて、

「親に捨てられた人間に限った話じゃないな、そーいや。生みの親が育ての親だったとしても、余裕がない奴だって、いるもんな。時々、いや、いつも考えなくちゃいけないんだけど、そいつらだって親を変えたくてしようがない思いをしてる。きっと、俺の事を恨んでるよ、ゲームをリセットするみたいに、親をリセット出来てうらめしい、って。親の方だってそうかもしれない。捨てたくて捨てたくてしようがないのに、捨てられなくて、でも余所では捨てた子が幸せになってる、とかさ」

「となると、捨てた親も恨まれるよな。抜け駆けで子を捨てやがって、って」

そう相槌を打つと哲治はうなずいた。言葉の道筋はどんどんドツボに嵌っていくように見えるが、常日頃頭の中で組み立てている言葉を繰り返すために喋っているのか、表情自体に曇りはない。しっかりと僕の方を見据えて話してくる。一緒に考えてほしいと訴えかけてくる。だから、僕も相槌を入れた。

「お前が抱いてる後ろめたさって、結局は循環を生むだけだよな。お前が元の親に固執すればするほど、親子を変えることは間違ってる、って考えが確かなものになつてさ、また歪みが生まれて苦しむ親子が増えて、抜け駆けせざるをえない親子が出てくる」

「親が簡単に取りかえられる社会とか、出来ればいいのにな」
「無理だよ。死ぬほど痛い思いして子どもを産む理由が無い」

「親の痛みがあつたら子どもを拘束していいの？」

「ダメだろ」

「じゃあ取りかえてもいいじゃん」

「そういうことを言ってるんじゃないって、そもそも取りかえるだけの子どもが生まれなんだって。ダメなのはダメだけだし、何だかんだ言つて親にとって子どもは所有物だし、痛みに見合った対価が欲しいんだよ」

「そうなのかな、と首を傾げてくる。」

「そうやって首を傾げるあたりが余裕なんだろうな。野田さんって、お前を所有物だつて思つてないだろ」

「ああ、確かに。そうか、そういうことか……」

今度は反芻するように首を縦に振る。野田さんの性格は恵治の育て方を見ればわかる。高校時代に学校を辞めて家を出て、アメリカで修業をしたいと言い出した養子に対して、野田さんは簡単に許可を出し留学費用をまとめて渡した。全て自腹で、元の親の遺産などは含まれていなかったらしい。もちろん、その時点で素質の片鱗を見せていたということもあるだろうけれど、それにしても、普通なら留めてしかるべきところだ。あるいは、金の工面は自分でしろと言うだろう。

オヤジはそこで俺を対等な人間として扱ったんだよ、と恵治は振り返っている。野田さんは眼鏡の奥で目を細めながら、行ってくると良い、とだけ言つたそう。猛反対を覚悟していた人間にとっては、思いの外あつてなく、それだけに表立って現れた以上のものを感じざる

を得ない態度だった。アメリカで野垂れ死んでも知ったことじゃない、何も養子だから言うんじゃない、仮に実の親と子だったとしても同じ判断を下したろう、寛容な親を演出するなんてつもりはさらさらない、むしろ厳格な、他人に等しい人間だろう、何故俺に許可を求めるんだ、俺に許可を求めなければお前は自信を得られないのか、俺と問答を繰り返した末に自信を得て海を渡りたいのか、そんな自信なんて役に立ちやしない、お前が勝手に決めた自信なんて与えてやらない、代わりに武器を与えてやる、金という武器がないからそんなみじめたらしい態度を取らざるを得ないんだ、これでもって闘え、自信は俺との戦いで奪い取るものだ……いくらか誇張はあるにせよ、野田さんにそうした向きがあるのは確かである。

「何にも言わなかった、つてのが大事なんだろうな。そこであれこれ言ったら、どんな言葉で取繕ったにせよ、相手を自分の思い通りにしたい、つていう意図が透けて見える。金の工面を自分一人でさせるのも一見責任を持たせるための手助けに見えるけど、身も蓋もなく言えば、俺に迷惑は掛けるなよ、つていう態度だし。」

そういう、人を物みたいに見る態度を全部取り払って、野田さんは金だけ渡して恵治を放り出した。金も親としての責任も何もかも放り捨てて恵治と同じ次元まで降りて行った。何にも持たない、絵画の才能くらいしかない人間と同じ目線にまで行って、言葉じゃなしに問いかけた。お前は本当にやれるのか、つて。そこに子どもを所有してるなんていう意識はないよ」

「でも、そういうのつて珍しい話なんだろう？」

「いわずもがなだ。結局、野田さんもこの屋敷が示す通り、そして医者という地位が示す通り、生まれもつての富裕者だったからこそ、そういう態度が取れた。」

「最初から余裕があるならともかく、余裕がなかったら、目の前にある自分の所有物は手放したくないよ、普通。それが身銭を切って手に入れたものなら、尚更」

「珍しい話が、普通になるにはどうすればいいんだろうな」

「生みの親が育ての親だつていう固定観念を崩すしかない」

「親が簡単に取りかえられる社会じゃダメなの？」

「それが唯一無二の家族の形になったら別の所に歪みが出てくるだろうね」

「……そっか、それもそうだな。基本は生みの親が育ての親、でもリタイアしてくる人間も出てくるかもしれないから、その人に対しては優しくしてあげる……なんか、月並みだな」

「月並みだけど難しいんだよ。それに生みの親が育ての親つてというのは一見体のつくりに沿った考えみたいに見えるけどさ、それがいざ、体のつくりに沿った考えなんだからこの通りにやれ、つて言われたすと、最早肉体からは離れた考えになつていく。本当なら個人個人にズレがあるはずなのに、そのズレをなかったことにしてしまう。多くのズレを、一つの型に無理やり嵌めこんでしまう。その制度が発達すれば、ズレが完全に隠されたものになつていく。ただ隠されただけで、

なかったことになるわけじゃない。だから、ある時不意にズレが現れてくる。こうなると、レールに乗って苦しいながらも何にも考えることなく生活してた方としては、たまったもんじゃない。こっちが型に嵌められながら暮らしてたのに、型に嵌ってない人間がいる、裏切り者がいる」

「そして、ズレがまた押し込められる……制度の中の人間を全部救わないといけないんだな」

「お前にはその才能があるよ」

脈絡もなく自分の話題になって、おまけに褒め言葉が聞こえてきたために、哲治は一度のけぞってから疑いの目を向けてきた。だけど、お世辞を使っているつもりはない。

「他人の事を自分の事のように考えるのって、難しいんだよ。一見優しいような奴だって、結局自分にとって利益になる時だけ優しくなるだけで、利益にならない奴は捨てるのが普通なんだ。その点、お前は自分に対して向けられる恨みにも自覚的だし、それを解決するにはどうしたらいいか、ってことをちゃんと考えられる。それも才能だよ」

「いや、さっき言ったじゃん、他人のことを気に掛けなくちゃいけない人間は、才能がない奴だって」

短い髪をいじりつつ、言葉を手繰るように話す。まだ、自信を持っていないらしい。あるいは、そこに賭けるだけの準備は整っていないらしい。

「才能のない奴は自分一人で利益を生みだせないから、他人から奪い

取るしかないんだよ。だから他人を気に掛ける。お前は違う。そういう損得勘定で動いてない。子どもを捨てた相手の事を思いやるなんて、何の得にもならないだろ」

「思いやりのある人間だって言われるくらいの得は、あるんじゃないかな」

「目の前にいる人間を助けたらそうだろうな。でも、自分と全然無関係で、会ったこともない人間の事を思いやったところで、感謝されるわけでもないだろ？」

そこで哲治はうつむいて黙り込んでしまった。面映ゆそうにはしていない。むしろ、自己評価に比すれば過大なまでの評価を与えられてしまったから、そのギャップに苦しんでいるといった感じがある。

「それだけ思いやりのある人間がなんで妹のことは考えてやれないんだろうな」

「なんだよ、それ」こちらを見ないまま、苦笑しつつ返事をした。「妹って、目の前にいる人間じゃん」

「目の前にいる人間だから、自分にとって得になってしまっからって考えるから思いやれないのか？」

「言ってることが滅茶苦茶だよ、目の前にいる人間を助けたら得になるだけだから、遠くに居る人間を助けるって言ったのはそっちじゃん」

「どっちかを助けるとも言ってない。目の前にいる人間だけを助けて思いやりのある人間だって言われるのは胡散臭い、遠くにいる人間だけを助けて思いやりのある人間だって言われるのも都合が良すぎる、

そう言いたいだけさ」

哲治はまた黙りこむ。七分丈の裾をつかんで、うつむく首の角度がより深くなっていくように見えた。とはいえ、単に僕から目を背けているわけではなく、今ここに居ない響子のことを考えているために視線をズラしたように見える。

「……別に嫌いってわけでもないんだよ。でも、放っておいてほしただけなんだ。俺だって、二年後には大学生だし自立しなきゃいけないし。ひよつとしたら里子になってたかもしれない。里子って十八歳になつたら親から離れなきゃいけないんだろ？ 当然、妹や弟とも離れなきゃいけない。なにより、自分で道を開いていかなきゃならない。あいつだって、来年は高校生だよ。いつまでも俺にかまってる暇なんてないんだって」

「自立したら、それまでの縁はすっぱりと切らなきゃいけないのか？」
「そういうことじゃない。ただ、おんぶにだっこはやめろってだけの話。あいつ、俺が中学校に上がるまで友達いなかったんだよ。それをなんとも思わず、俺や俺の友達とばかり遊んでいた。最近じゃそういうこともなくなってきたけど、それだって俺があいつの世話でできなくなったから、自分で全部やらなくちゃいけなくなったから、性格が変わっていったんだよ」

「変わっていったんなら分別も出来るだろ。おんぶにだっこことまでは言わずとも、元通りの仲になっても良いんじゃないのか？」

「仲良くなる必要もないじゃん」と首を振って、声を荒らげた。「妹

に対して兄貴が優しくする必要だってない。むしろ、家の中に敵がいれば、外に出た時にいけすかない奴がいても対処しやすいだろ。俺はそういう役割をやってるだけだって」

「それだってお前が勝手に決めてることに過ぎない。妹のためだと言ってても、実際に響子がどう思ってるかはわからないじゃないか。響子がそうしてくれて言ってるならともかく、言ってたとしてもお前が尖った態度で話してるから、その真似をしてるだけだろ」

唇を噛んで口をつぐんだ。けれど、責めることをやめてはいけない。「高校生になるんだからとか、大学生になるんだからとか、外側から借りた理由でもって自分の態度を決めても道を開く事にはならないよ。誰かから嫌われても、それが世の中では当たり前だから、って言いつつ逃げ道を作ってるだけだろ。お前が響子をどう思ってるかが重要じゃないんだよ。響子がお前をどう思っているかが重要で、それに對してどう応えるかが重要なんだよ」

いよいようつむいていた首も落ち着きがなくなっていく、机の方を見たり、入口の方を見たりするようになってしまった。

話しながら、哲治は昔親から捨てられた記憶を思い返しながら、その状態にまで自分を貶める、つまり嫌われていた頃の自分にあえて戻ること、家の外の世界について考えているのではないか、家族から愛されている状態から一歩外に出ようとしているのではないか、という推測に行き着いた。しかし、本人の口からはその話題は出ていないので、何も言わないでおいた。

「まあ、難しいけど、じっくりと考えるよ。それこそ苦しんでる人を救う練習だと思ってるさ」

多少軽薄な言葉だと我ながら思った。ただ、落ち着かない首が止まって、少しだけ僕の方へと傾けられた。

「練習って言い方、なんかひどいな」

「どっちに対して？」

少し言葉を探るように間を置いて、「どっちに対してもだよ、多分」

そうだな、とうなずいてカステラをつまんだ。少し乾き始めてはいるが生地のふくらみは保たれており、問題なく頬張れる。哲治にも薦めたが、断られてしまった。けれど、一つ溜息をついて、ようやく顔が上げられた。

「でもさあ、一歩間違えたらシスコンだぜ、俺」冗談めかした口調で哲治は言った。

「シスコンなくらいがちょうどいいんじゃないのか？ 近親相姦まで行くとまずいけど、兄妹は喧嘩するべきものだって考えもまずい」

「桜井さんには妹がいないからそう言えるんだよ……」ふてくされるような態度を取りかけたかと思うと、何かに気付いたように上を向いて考え込んだ。「ああ、薫さんってむしろ妹みたいな感じなのかな」

哲治に従って天井の方を見ていたから、薫のことは容易に脳裏に浮かんだ。こちらの気も知らず好き勝手に振舞っている彼女の態度を鑑みてみれば、そしてそうした態度に多少嫌気がさしつつも受け止めている自分を振り返ってみればそうかもしれない。

「だから俺に対しては厳しいんだな。妹とは仲良くやるべきだ、って思ってるから」

冗談として言われた言葉だが、あながち間違いでもない気がした。「でも、それって恋人に対する態度かな、やっぱり」

一拍置かれてそれまでの調子と変わりない、単純な疑問が投げかけられたので、初めは事もなげに聞いていた。けれど、こちらに視線を固めたまま、まじまじと見てくるので、間もなく怪訝な目で相手を見返すことになってしまった。

「なんだよ、急に」

「いや、それも一つの選択肢だとは思うよ。恋人同士って、普通はお互い干渉し合って当然なんだろう？ でも、そうじゃない、ってことは、そうじゃなくても恋人としてやっていけるっていう可能性なわけじゃない」

フォローするような慌てた口調だったので、裏にある含みを勘ぐらざるを得なかった。

「今更遠慮するようなことかよ、なんでも言ってみなっ」

出来るだけ柔らかく返してみると、哲治は少し言い淀んだ。ただ、それは言葉をまとめるための時間だったようで、

「正直に言うときまでの話で、じゃあ桜井さんはどうなんだよ、って思ってたんだよ。逆ギレみたいに思われかねないから言わなかったんだけど、桜井さんの薫さんに対する態度って、相手を大事にするフリをして、自分が楽になりたいだけのものじゃないかって」

その口調に責めるような調子はなかったため、安易に反論は出来なかった。

「桜井さんはそんなつもりないんだろうから、俺の勘違いなんだろうけど」

そうした物わかりの良い態度に偽りはないだろう。しかし、半ばこちらを買い被ってくるような言い方をするから、むずがゆさを感じて、自分を卑下したくなる。

「そういう節が無いって言ったら嘘になるし、別に遠慮なく指摘してくれても構わないよ」

先程まで厳しく言い過ぎたという負い目もあるから、多少の事は受け止めようという気にもなる。それを受けて、哲治は言葉を選ぶための間を取ってから喋りはじめた。

「そういう、自分を楽にしてくれるところがあるから薫さんと付き合ってるわけ？」

これも素朴な訊ね方だった。

楽にしてくれる人間でなければ、そもそも付き合おうとする気さえ起こさないだろう。けれど、哲治の指摘しているのがそういう話ではないことくらい、わかっているつもりだ。

そもそも薫がアパートを決めないでふらついていたところを、僕の部屋に連れてきた。そこでいくらかの迷惑は被っている。家事もほとんど僕がやっている。普段薫が喋る内容も、暮らしに当たって必要な話以外は理解が追いつかない事がしばしばだ。

けれど、僕は干渉しない。薫の性格は変わらないだろうし、それを元に生きてきて、それなりの人生を送っているのだから、これからも自由に暮らしていけばいい。その邪魔をしてしまったら、彼女の隣にいる意味はない。彼女の雇い主である恵治は金払いがいいから、暮らしの面ではむしろ助かっている。恵治の言う通り、一緒に居てわからない事はばかり喋ってくるから、とりあえず飽きることはない。

僕は薫のリズムを崩さなければ良い。彼女が彼女でいてくれるだけで十分に楽しいし、これからも彼女が見せてくれる様々な景色をありのままに受け取るだけで満足である。

「だったら、その隣にいるのって桜井さんじゃなくてもいいんじゃないの？」

哲治の言いたい事はそういうことだ。素朴な質問になってはいるが、特別意地の悪い表情を浮かべるでもなく、自身も首を傾げて考えているのだから、おそらく悪気はない。

「別れる、って言ってるわけじゃなくてさ、干渉してないフリして、実は干渉してるから、桜井さんは薫さんと一緒に居るんじゃないかな。それを認めないのはどうなんだ、って……」

認めると言われたなら認めるつもりだ。僕の態度がそう見えるのならその通りなのだろう……もちろん、こうした言葉は言い逃れであり、判断を他人に委ねているだけである。

「俺は中学の時に彼女が一人いたけど、一回喧嘩しただけで別れたから、付き合い方とか全く分かんないし、言えた立場じゃないから、

別に真に受けなくていいよ。桜井さんは、きつと色々な経験を積んで、女の子のことがわかった上で、そういう態度を取ってるんだろうし」
フオローするような言葉と、あわてて話す口調で、自分が黙りこくっていたことに気付いた。

「……自分の事は考えてるようで、意外と顧みないものだな」

「……ま、おあいこってことで」

そう言つて哲治が笑うのにつられて、笑い返した。笑うだけの余裕があるから分かる。おそらく、そうした自分勝手な態度について深く考えずとも薫とは上手くやっついていけるだろう。相手が自分勝手であるのだし、少しくらい無責任な態度を取ってもいいはずだろう……：：：そう思い込んで一年以上の歳月が過ぎていくのが、とりあえずの証明だ。ただ、そうした態度が甘えと言われても、仕方はない。

「もう日が暮れるな」

哲治が窓の方を振り返った。それまでは良い具合に部屋に光を与えてくれた太陽が、今では目にきつい刺激を与え始めているので、部屋の主がカーテンを閉めてくれた。黒い布地を隔てた視界からでも、山の稜線に近づきつつある太陽を透かして見ることは出来る。むしろ部屋が暗くなったことで、白い輪郭がはっきりと浮き出ている様子がより目立って見えた。カーテンいっぱい陽光を浴びせてくるので、部屋が灰白く包まれてくる。

そうやって相手から視線を外していると、間もなく聞こえてきた、木の階段を上ってくる足音をしっかりと意識出来た。

「邪魔していいかな？」

襖越しにも音の一つ一つがはつきりと聞こえてきた声は、野田さんのものだった。襖が開いて、白いボーダーのシャツの上に乗った、目鼻立ちのくつきりとした浅黒い顔が現れたかと思うと、僕たちを見定めつつ皺を寄せて微笑んでみせた。

「いやあ、私も逃げてきましたよ」

「逃げたって、何が？」哲治が訊く。

「女の話だよ。恵治が長電話を始めたから、服のことだの料理のことだの、色々出てくるんだ。幸太を置いて、ね」

薫にとっては、双方とも興味を持たない話のはずだ。つまり、切りだされた話題に相槌を打っている内に、何かの拍子で勝手に盛り上がりはじめて、それに対して他の二人が調子を合わせてくれているのだろう。

「さしあたり、こちらは男の話というわけだ。漱石の話をしていたんですか？」

「そんなところですね」

哲治の方を見つつ言くと、やはりこちらに従ってうなずいてみせた。「それはいいですね。男の話という感じで実によろしい。女性が漱石を読むことはあまりないでしょう。あの時代は両性ともに良く読まれていたらしいが、時代が経つにつれて色々な作家が現れて、漱石が異性を嫌な風を書くことがわかってしまったからすっかり女性は離れてしまった。あれは男の世界です、女を拒んでいます」

やや辛辣な言葉ではあったが、こちらに向かつて目配せをしながら、
そうでしたよね、とばかりに確認しつつ語りかけてくるので、興醒め
がするようなことはない。いつもと変わりない話しぶりだ。

「漱石自身女が嫌いだったのではないですか」と野田さんが訊ねてく
るので、

「そうかもしれませんね。妻に対して手酷かったらしいですし」

とお望み通りに同意した。別におべっかを使うつもりではない。実
際に漱石の人生を振り返ってみると、女を嫌っている節が仄見える。
あくまで仄見える程度だから、推測の域に留まるといふことでお互い
に申し合わせをしておく。

「ただ、それでいて美人には弱い。大塚楠緒という人がいまして、彼
女が漱石宅を訪ねた時、ちょうど細君と喧嘩をしているところだった。
決まりが悪くなって、後々楠緒の家にもで出向いて、あの時機嫌が悪
かったのはこういうことがあったのだ、と弁解する。細君を相手にす
れば頭ごなしに罵倒を投げつけるばかりなのに、余所の美人になると
こうですから、到底世の女性には受け付けにくいことでしょう」

「オヤジって漱石読んでたの？」哲治が口を挟む。

「全集を持っていたんだがねえ、売ったんだよ。嵩張るから」

「もったいねえ」

「漱石は誰もが読んでいるだろう。誰もが読んでいるから、話を訊く
だけで十分読んだ気になれるとわかったのさ。今の話だって人から訊
いたことだ」

「それって横着じゃん」親を相手に呆れた顔をする。「ま、おかげで
桜井さんと話が出来るから、良いと言えれば良いかもしれないけど」

「それは良いに決まってるさ。この人くらい話が上手い人はなかなか
いない」

「医者よりも？」

「医者なんて口が上手いだけだよ。自分だけ一人勝手に新しい機器だ
の学会の報告だのの話をするばかりでこっちにてんで興味が無い。忙
しそうに、面倒そうに話して、それを自慢するばかりなんだ。そう言
うのは話が上手いというんじゃない。話の上手さというのは相手の持
ち上げ方に関わるものなんだ」

「オヤジが言うのと説得力があるな」

皮肉を前面に出した口調に、皮肉が重ねられて、父親は一杯食わさ
れたという具合にこちらに向かつて気恥ずかしげに笑いかけてきた。

僕のこととはともかく、持ち出された定義に合わせれば野田さんこそ
話が上手い人間だろう。仕事の合間の空白を埋めるためにぎこちない
会話を持ち出してくる同僚と違って、病院に納品に行くたび、野田さ
んは僕の興味を誘い出す話をしてくれる。一見気ままに振舞っている
フリをして、その実こちらに対して、ここそ君が興味を持っている
ところなのではないか、という具合に探りを入れてくるから、こちら
としても安心しつつ無理なく返答することが出来る。野田さんと話を
していると、気を張ることが無いから日常の瑣末な問題を忘れられる
のだ。

「話を戻そう。家に来た女性の身の上を一通り聞いた上で、人生について考えさせられたなんてことも平然と言うんです。まあ漱石宅は弟子を始めとして人が年がら年中やって来るところだから、女を招いて話を訊くなんてなんともない事なのだけど、人生について考えさせられることばかりはそうそうない。大方、その人も美人だったのでよね」

「美人が出てくる小説も多いですね。『草枕』の那美さん、『虞美人草』の藤尾、『三四郎』の美禰子、いずれも男を嘲弄したり、癪に障るところがあつたり、やっぱり嫌は嫌だったみたいですが」

「なんか、漱石って嫌な奴だな」と口を挟む哲治に対して、
「ただ、男に対しては優しい」と野田さんは間髪をいれず応えた。「もちろん嫌いな男もいるにはいるが、一度目を掛けた相手はしっかりと世話をするんだ。森田草平とかね、心中を図ったはいいものの、冬山を登るのに疲れて坐りこんでしまったところを見つけられるくらい度し難い男だったんだ。この男を漱石は世間様から一時かくまったばかりか、小説にしてはどうか、と文章指導までした。これが当たったおかげで森田は当面の食い扶持を得られたんだよ」

「漱石の弟子の話は事欠きませぬね。男を相手にした時の方がモテたのではないかというくらい」

「ええ、何より引きうけた仕事はちゃんと取りかかると。ぶっきらぼうで気難しい性格として語られがちなのですが、ほだされると、とことんまでのめり込んでしまう。そのあたりが、嫌な仕事だろうと

そつなくこなしてこそ一流だとする男には受けるのでしょうか。ただ、だまされやすいとも言えるわけで、典型的なのが養父との因縁です」
一瞬、哲治の眉がしかめられて、悟られないようにするためか余所を向いた。

「イギリスに行った時もそうでしたね。英文学はちゃんと学んでいたけれど、英語を勉強してこいと言われたから困ってしまったそうで」
「松山を散々に罵倒した結果転任した熊本では、生徒に恵まれてとりあえずは落ち着いた暮らしをしていた。留学はその矢先の出来事でしたねえ。おまけに妻ともソリが合わなかった。親友の子規がそう長くないと悟っていたからか、俳句などにも凝り始めていた時期だった。自分にとって性分に合う出来事と、合わない出来事がごちゃ混ぜにやってくるのですから、発狂するのもやむなしといったところでしょう」
「漱石って教師をやめて小説家になったんだよな、ひよっとしたら教師も嫌だったの？」
「気付くと哲治は顔をこちらに戻っていた。」

「どうか。弟子は教師時代に薰陶を受けた者が多かったから、一概には言えないところがある。まあ、人に教えるのは好きだけれど、それを職業にするには懐疑的だった、といったところだろうか。当時からしてみれば立身出世してお国のために奉仕してこそ男子は一人前であるから、そうした人材を育成するのでもまたお国のため、といったところはあつたらう。そこでも性の合わなさがあったらうね。漱石は、漢文学の方が好きな厭世主義者だったから」

「一時期の小説は明確に俗なものに対して嫌悪を表明してますね。」

『草枕』とか、『野分』とか」

「そのあたりが漱石の本分でしよう。朝日に雇われて職業小説家になつてからは俗な世界を書くようになったけれど、あれこそ、ほだされた結果ですよ。『それから』だつてあれこれ語られてはいるが、本当なら高等遊民のまま人生を終わっているはずだった。遺作の『明暗』でさえ、俗なものを書いていると心が荒れるといつて、漢詩を片手間に書いていたくらいだ。あれがいたずらに長くなつていったのも、やはり性の合わなさを根底に感じていたからこそだろうし、『こころ』だつてあれだけの長さのある、いびつな遺書になつてしまったのも内心は俗臭いものが嫌だったからに他ならないと思いますよ」

「でもさ、漱石は本心ではどう思つても、生きるにあたつて必要な事は逃げずに引きうけなくちゃいけない、つて手本を示したんじゃないのかな？」

哲治が強く口を挟んだ。それまでは話題に乗っているようで乗りきれない口口の挟み方をしてはいたものの、野田さんのリズムは崩さないように問いかけていた。しかし、今回はリズムを崩しているもの、ちゃんと話題に乗りきれている。だから、というべきか、その口調には強い否定のニュアンスを感じ取れた。

対する野田さんは、一度しつかりとうなずいた。

「そうだね。実際、当時は森田みたいな、やぶれかぶれの自然主義が跋扈していた。彼らは告白という体裁を取つて世間に顔向けできない自分を書く事で、最終的には自分を認めてもらおうとしていた。罪を

悔いることのできる自分、というものをね。といつても、それで罪が償われるわけがない。罪というものは、罪を犯した相手が生きている限り、あるいはたとえ相手が死んだとしても、罪を犯した出来事を誰かが覚えている限り、償われることなどない、一生向き合わなければならぬもののはずなんだ。結局、自然主義の連中のやっていることは、紙の上でそれらと向き合っているだけで、現実の上では一向に見向きもしない、土下座をしているフリをして舌を出しているような真似だつたんだよ。

その点、消えない罪を描き続けた漱石は偉いものだった。ただ」

やっぱり、と言いたげに養父を見ていた哲治の表情が、ただ、という言葉で途端に曇り出した。

「消えない罪を描いていたとはいえ、私生活では漱石もろくでもない人間だつたんだよ。妻は自殺未遂をするくらい、漱石に対して酷い仕打ちを受けていた。子どもたちも漱石が死んでから、世間で高い評価を受ける作家としての父親に反発して、虐待の事実を暴露するくらいだった。弟子や世間に対しては良い顔をするのに、身内に対してはもうでもなかつた」

話を聞いている間、哲治の目は瞬きもしなかつた。顔はこちらの方を向いてはいるが、おそらく現実の映像はほとんど認識できていなかっただろう。視線を宙に浮かせながら、漱石の暴虐的な一面を想像しているのかもしれない。

「まあ、どこかでそういう、気配りから漏れるところがなければ、精

神ばかりか胃を患っている漱石としては苦しみが極まっていたらうけどね。人間というものは、生憎そういう風に出てくる」

野田さんはフォローするような言葉を投げかけて、落ち着く時間を作った。ようやく我に返ったらしい哲治は一度窓の方を向いてから、何度かうなずいて、こちらを向いた。しかし、顔は上げきれていない。そうした様子を察したのか、野田さんは僕の方を向いた。

「弟子も弟子で、森田をはじめそういう人間が集まっていたから、漱石とはソリが合ったんでしょうね。武士の感性ですよ、あれは。家庭の平和やお国への奉仕よりも、主君への忠誠の方が大事なんです。小宮豊隆なんて、漱石が修善寺で血を吐いた時には結婚式の準備を切り上げて見舞いに来たくらいです。おまけに結婚するのが嫌になってきたという有様で、我々としては責任がないように見えるけれど、あの時代はそれが責任だったのでしょう。家庭よりも仕事、やはり男の世界ですね」

小宮や森田ほどでないにせよ、漱石の弟子にはおしなべて忠君的な傾向がある。内田百閒は漱石が世間には出さなかった、絵や俳句のよきな習作はことごとく蒐集していたという。あるいは、漱石の友人は様々な回想記を残しているが、一点だけ、他に婚約者がいた大塚楠緒との恋愛沙汰には皆口を閉ざしている。そこにはやはり、忠義とでも評すべき関係があったには違いない。

とはいえ、話を聞いていると、そうした漱石にまつわる想像よりも、野田さんが眼鏡越しに見つめてくる目の方に意識は向けられざるを

得なかった。やはり、ここにこそ君の興味があるのではないか、という具合に、口調を工夫しながらこちらに問いかけてくる。

「漱石が単なる病死で済んだからいいけれど、場合が場合なら、どうだったか……」

一瞬間が置かれると、僕は思わず哲治の方を見てしまった。その様子に変化はない。相変わらず、頭を半端に上げながら視線を養父の方に固定しきれずにいる。

「もちろん、末弟子には新しい時代の責任を背負ってしまった人もいて、それが芥川龍之介という人です。彼はもう江戸時代の人ではなかった。漱石は横目で、ほだされながら雇われている身として時代のひずみを見ることができたが、彼にとつては喫緊の課題だった。そして、負いきれなくなって自殺してしまった」

「じゃあ、どうすればいいの？」ようやく哲治が声を出した。

「そればかりは請け負いかねる課題だよ。たぶん、誰ひとりとして答えを出しきれた者はいないんじゃないのかな。あるいは、答えを出しきれたとして、やりとおせた者はいやしない。誰かを大切にしたら、他の誰かは犠牲になってしまう。月並みなことだね」

そう言うと、野田さんは咳払いをして窓を見た。日が暮れてしまったか、と尋ねるので僕と哲治もそちらを見た。いつのまにか、カーテン越しに赤い光線が部屋に入り込んでいる。窓の縁に陣取っていたはずの太陽は、今や山の稜線に向かって輪郭を滲ませつつ沈もうとしているところだった。

「さて、パーティーの準備も始まったようだね」

階下の方に耳を澄ますと、食器が運ばれていると思しき甲高い音が聞こえてきた。先に行っているよ、と野田さんは立ち上がって襖を開けた。開けられたまま出て行ったので、背筋を伸ばして廊下を歩くところまで、背中を追いかけることができた。階段を下っていく音も、一段一段しつかりと、リズムを崩すことなく丁寧歩いている様子のはつきりと聞き取れた。

「オヤジもさ、そういう経験があるのかな」

哲治がこちらを見ずにつぶやいた。月並みなことだと本人が言うからには、あると見積もった方が良いだろう。

「でも、教えてくれないと思うよ」

「なんで？」

「直感」

なんだよ、それ、と苦笑されてしまったが、半ば願望の混ざった答えだった。過去を打ち明けられたところで、それを受け止めきれぬだろうか。野田さんはこちらをしつかりと見つめながら話をしていった。一方で僕たちは顔を背けてしまった。少なくともその違いが解消されない限りは、恵治の言葉を借りれば対等の立場になれない限りは、野田さんの過去もまともに受け止められないかもしれない。

「僕はともかく、お前には教えてくれるかな。才能があるから」

「からかうなよ……まあ、頑張ってみるよ」

そう言うのと、僕たちは部屋を出て階段を下りて行った。

「それじゃ、電気消すぞ」

恵治がリモコンを取って電気を消すと、明かりはケーキに刺さったロウソクの火と、縁側から入りこんでくる外の淡い光だけとなった。「ほら、お前のためのケーキだぞ？」

年の離れた兄に抱きかかえられて、幸太がケーキを見下ろす格好になる。四本のロウソクがそれぞれの火を寄せ合せて、テーブルの上だけに光を投げかけている様子を、パーティーの主役はじつと見つめていた。

「危ないって、ケイ兄」左隣に坐った響子が身を乗り出した。

「大丈夫だつての。ほら、一気に吹き消してみろ？」

果たして見下ろした格好で小さな体が息を吸い込めるのかと思っただが、間もなく赤く染まった顔が膨らみ、口をすぼませながら思いきり息を吐き出した。一度では消えず、兄の支えを借りながら体を揺すらせつつ、何度も息を吐く。ようやく火が消えたかと思うと、拍手とともに電気が点いた。

「おめでどう、幸太！」

恵治の右隣に坐った薫の合図で、クラッカーが鳴される。次々と浴びせられる破裂音によって小さな目は一瞬丸くなったものの、色とりどりのテーブルが顔に降ってくると、すぐに頬を緩ませ笑みを見せた。「ていうか、ケイ兄危なすぎ。やけどしたらどうすんの」

「一人だけケーキを上から眺められない方が可哀想だろ。そもそも見

たか、このじつと見る目つき。今のでオレンジを体得したな」

呆れた表情を見せる姉にも、頭を撫でてくる兄にも関心は寄せないで、小さな手は絡まり合ったテープを結んだり解いたりしながら遊んでいた。

奥さんによってケーキが切り分けられて、皆に一切れずつ配られる。野田さんと恵治はビールを、その他はジュースやお茶など各々の好みの飲み物を採りながら、用意された料理に手を付け始めた。

「絵具を組み合わせることも大事だけど、現実から素材を得るのが大事だからね、画家は」向かいにいる野田さんが言う。

「正しく。やっぱり素質があるね、幸太は」

「恵治よりも目覚めるのは早いんじゃない？ 恵治が小さかった頃は、むしろ外でいっぱい遊ぶ子だったから」野田さんの右隣に坐った奥さんが言う。

「その分俺は現実を良く見てたからね。でも幸太は俺を追い抜くね、なぜなら俺は俺に指導されなかったから」

「第一、幸太って画家になるつもりなの？」

一人で笑う恵治に対して、野田さんの左隣に坐った哲治が口を挟んだ。

「なるに決まってるんだろ。俺が援助してやるよ」

「いや、そういうんじゃないわかって、本人の意志は変わるだろってこと」

「本人の意志を持ち出すならお前が茶々入れるまでもないだろうが」
「大丈夫だよ、センセイ。私も手伝ってあげるから。プレゼントだっ

て、ほら！」

そういうと薫は膝に乗せていた紙袋を取りだして、中から白いスモックを取り出した。野田さんが、絵を描くたびに服が汚れて困る、と言っていたのを思い出し、オーダーメイドで作ってもらったものである。

「あら、ありがとうございます」奥さんが頭を下げた。

「着てみなよ、絶対似合うから」

一度兄の膝から立たされて、着ている服の上からスモックに袖を通すと、小さな手は隠れてしまい、足元も裾によってほとんど覆われてしまう。そのあたりは成長も考慮しているのだけれど、幸太は不思議そうに自分の体に着せられているスモックを見回していた。

「デザインがないから、ちよつと戸惑ってるみたい」響子が言う。

「そのあたりは自分で描いても全然構わないよ、ていうか、そのための白衣だから」

「何も言わなくても描いちゃいそうだね、この様子だと」

大人たちの目も気にせず、幸太は袖を引っ張ったり、胸のあたりを裏返したりしている。

「幸太が画家かあ……ちよつと勘弁してほしいな。まともな人間が兄弟に居なくなっちゃうじゃん」

「まともな人間じゃなくても生きていけるってことはケイ兄が証明してるだろ」

「言えてるけど、テツ兄はそうじゃないかもしれないじゃん。ていう

か、テツ兄は落ちぶれるね、絶対」

「お前だって人のこと言えるのかよ」

「待て待て、まとも、なんて価値観は他人が決めるもんだ。お前らは他人に支配されてるんだよ」

口喧嘩の兆候を見せ始めた弟と妹に、止める気のない兄の一言が投げかけられたことよって呆れてしまったのか、テーブル越しのやりとりは一旦交わされなくなった。

「お兄ちゃんとお姉ちゃん、ケンカしないの？」

気付くと幸太がこちらを向いていた。何故だかガツカリしたような顔をして、兄と姉を交互に見交わしている。

「幸太にとっちゃお前らの喧嘩もヒーローと悪役が闘うみたいなもんだ」

恵治が二人を見てから、僕の方も向いて言ったので、

「そうみたいだね」

と返すと、アテが外れたように目を見開いてみせた。

「子どもにしてみれば喧嘩もショーみたいなものなんだってさ」

弟と妹に向かって言うと、それぞれが苦虫を噛みつぶしたような顔を浮かべ出した。

「そもそもお前が突っかかってくるのが悪い」

「普段から気に入らない態度取ってるのはテツ兄のほうじゃん」

お互いから目を反らしつつ、静かな声で応酬を交わす。野田さんと奥さんは苦笑しながら見守り、恵治は気にも留めず料理に手を付け、

幸太はこれから何かが起こるのではないかと期待の眼差しを送っている。

「喧嘩はいけないよ。幸太に悪い影響が出ちゃうって。おいで、幸太」
調子の外れた合いの手によって、二人はいよいよ決まり悪そうな様子を見せる。

スモックを着たまま、今度は薫の膝に乗せられた幸太は自分の手でケーキに手を付けだした。握りしめられたフォークでスポンジを粗く切り、刺して口へと運ぶ。その瞬間、クリームが垂れて白衣に紛れてしまう。早速役に立った格好だ。

「一日中着せていた方がよさそうですね」奥さんが笑いながら言う。

「それならもう一着プレゼントしますよ？」

「いえ、そこまでお世話になるわけにはいきません。これは大切に扱ってほしい。きつと思いい出になるでしょうから」

「思いい出にするなら汚しまくった方がいい気はするけどな」

「恵治みたいにボロボロにされても困るは困るのよ。哲治のお下がりにも出来ないくらいだったから」

それもそうだ、と言って恵治はビールを飲んだ。

「遠慮なくボロボロにしてくれた方が私としては嬉しいですよ？
サイズも合わなくなるだろうから、せめて誕生日が来るたびに送らせてください。その都度その都度、私たちに見せてほしいな、幸太がどんな風にこの白衣を使ったか、幸太が色んな絵具を使いながらどんな風に自分をデザインしたか」

「一年したら別のところに興味が出てくるかもよ」

そう言うと、薫が反発の目を向けてきた。

「なんで水差すようなこと言うのさ」

「大人にとっては好き勝手やってるようでも、子どもにとっては自分をデザインするための方法なんじゃないかな。あれこれやって自分に似合ったものを探すプロセスってやつ。それこそ、画家が一つの色を際立たせてくれる他の色を見つめるみたいなものですよ」

「ううん……そう言われると反論しづらい」

唸りながら幸太を見下ろす。ちまちまとケーキを食べていたところに、視線がやってきたから、不思議そうに首を傾げながら見上げ返してくる。

「まあ、しばらくは本人のやりたいことを見守ろうじゃないか」野田さんが言う。

「そうですね」奥さんが同意する。

「画家をやりたいって言ったなら私に相談してくださいね、全力でフォローしますから」

「それは俺の役目だから譲らん」

勢い込む薫に対し、恵治がすぐさま言い返す。語気の強さに感応したのか、それまで不思議そうに見上げていた目が、途端に兄とその弟子をせわしなく見比べ始めた。

「喧嘩に対して敏感みたいですね」

「囃し立てる才能に目覚めかねませんね。困ったものだ」

野田さんが快活に笑って、恵治が皮肉ぶった笑いを浮かべると、そこにはもう何もないと悟ったのか、小さな手はまたケーキに向かって伸びて行った。

時計が八時半を回ると、幸太が目を擦り始めた上に僕たちの電車の時間もあつたので、パーティーはお開きとなった。食器を片づけるのを手伝おうとすると、お客様にそれはさせられない、と奥さんが言ったので、その言葉に甘えて玄関に向かった。居間を出る時、

「バイバイ、薫お姉ちゃん」

と恵治に抱かれた小さな手が振られた。僕に対しての見送りがなかったことの埋め合わせと言うわけでもないだろうが、哲治と響子からも目配せが送られ、

「それでは、また」

と赤らんだ顔をした野田さんから声を掛けられた。

外へ出ると、日中の陽気とは裏腹の春の名残が感じられる、ひんやりとした空気が体を包んだ。家々の明かりも乏しく、都心にあるようなネオンの光で空が白むということもない。点々と設置された外灯がわずかに道の先を照らすだけで、少し視線を伸ばしても黒々とした山の連なりが見えるだけだ。それも、飛行機のための赤色灯がなければ山だと気付きは出来ず、ただ暗闇がそびえているとしか見えないかもしれない。山と空の境目も、空の方が星のおかげでわずかに青くなっているくらいの区別しかつきはしない。

「なんか疲れてるね、大丈夫？」

横からふと声が聞えた。

「どこらへんが？」

「雰囲気、としか言いようがないなあ。そもそもパーティーの時から疲れてたよ。なんていうか、一人だけ遠くの方にいる感じ？ あんまり喋らなかつたし、喋つたとしても、すぐ引つ込んじゃつてた」

心配はしてみせるが、口調はいつもと変わりがない。わずかな光の中を歩いているため、詳しい表情は読み取れないが、大方首を傾げながら自分の世界に入り込みつつ話しているのだろう。

「テツ君と喋りすぎて疲れちゃつたんじゃないの？ あれだけ私にハシヤぐなつて言つてたのに、自分がハシヤいじゃつてるじゃん」

軽い笑いが静かな道に響く。否定できかねたので黙っていると、反応がないのが不満だったのか、こちらを向いて強い視線を送ってきて、

「ていうか、あの時響子ちゃんと何話してたのさ。教えてよ」

と訊いてきた。とりあえず、事実だけは話しておくに越したことはない。

「あいつと哲治が喧嘩してるのをどうにか出来ないかつて話。どっちも仲直りはしたいんだけど、中々出来なくて困ってるんだって」

「だったら私に相談すればよかったのに。ちゃんと取り持つてあげよ」

「お前が取り持つて上手く行つても、お前がない時はどうすればいいんだよ。結局、二人が自分たちの力で解決しないとあいつらは変わ

らないんだって」

なるほどねえ、と気付いたようにうなずいてみせる。

「テツ君とは何を話してたの？」

これも、話せる事実だけは話しておく。

「おおむね変わりないよ。でも、響子は哲治と仲直りしたがってたけど、あいつは勘違いしてた。喧嘩するのが普通だつて」

「普通つてどういうこと？」

「俺と違って世の中は響子に対して厳しい目を向けてくるだろうから、今の内に訓練してやるんだつてさ」

「それは勘違いに他ならないね。第一響子ちゃんのことを悪く言う人間なんていないに決まつてるじゃん。あんなに可愛い子を」

「お前は響子のことを養子だろうと関係ない、つて目で見てる。でも、世の中には残念だけど養子つていうだけで変な目で見る奴がいるんだよ」

ふうん、という声が響く。話を理解しているというより、興味はないけれど僕に相槌を打つことだけは忘れない、といった感じがある。

「テツ君と話したのはそれだけ？」

「漱石の話もした。途中で野田さんも入ってきて、一緒に色々教えてもらったよ」

「へえ、じゃあ色々勉強しながら悩んではいるんだね。なら、大丈夫かな」

「大丈夫つて、何が？」

「漱石なら漱石を読んで、その悩みを知らながら悩み方を勉強してるわけでしょ？ だったらその内仲直りは出来るんじゃないかな。一人で悩んでたら勘違いも勘違いってわからなくなるけど、誰かと一緒に悩んでたら、それは勘違いだって教えてくれるだろうしね」

哲治の場合、そもそも漱石を勘違いしていた節があるのだが、それよりも、薫が悩む行為それ自体に理解を示していることが意外だった。「お前は悩んでたっつてしょうがない、っつていうタイプだと思っただけど」

それこそ、師匠の恵治のように。薫は唸ってから視線を外し、道の手を見つつ話し始めた。

「最初はそうだと思っただけどね。でも、悩むのが生きる上で必要な人と悩まなくても良い人がいることくらいは、分かってきたかな。テツ君は悩む人で、もちろんカズミも悩む人」

喋りながら、僕の方へと視線を戻してきた。ちょうど外灯の下に差し掛かったので、白いレースのついたトップスが照らされ、それにともなって掘りの薄い顔立ちが一瞬はつきりとしなくなり、暗闇へと向かうにつれて一つ一つのパーツが現れ出した。

「でもって、その二つのタイプの人たちが、それぞれのグループで喋ってるだけじゃダメで、もつと二つのグループが一緒になって励まし合えばいい、っつていう風には考えてるよ。私とカズミみたいに」

いきなり僕の名前が呼ばれたので、思わず相手の顔を凝視してしまつた。それなりに強い視線を浴びせたとは思うが、ショートカットが

首を傾げた拍子に多少揺れただけで、黒い瞳は外灯の白い光を入れ込みつつこちらへと向けられている。

「良くも悪くも、僕とお前はお互いに干渉してないと思うけど」

「そうかもしれないけどさ、だからって無関係なわけじゃないでしょ。油と水みたいにお互いを邪魔だっと思ってるわけでもない。油と水がくつきりと分けられてるのって、邪魔だっと思ってるわけじゃなくて、混ざり合っちゃいけないってわかってるから分けられると思うんだよね。混ざり合わない事で、お互いの良さを引き立たせてる、っつていうのかな？」

視線は段々と僕から離れて、空の方へと向けられていく。わかりやすいようにするためか、油と水をたとえに使ってはいるが、どうにも話し方が下手で変わらなず伝わってくる場所がない。そもそも、そのたとえで僕と薫の関係が説明できるのだろうか？ しかし、僕にもわかるように、それなりに真剣に考えているということはわかったので、「お前もそんな風に他人を考えることってあるんだな」

「あるに決まってるよ。また馬鹿にして」

答めてくるので、もう少し言い方を考えればよかったと思う。見直した、と言えはやはり馬鹿にしていると思われるだろうが、今まで感じたことのない、敬意に近い感情を覚えたのは事実だった。

「とにかく、悩んだって仕方ないっつて言うばかりじゃダメなこと。悩めば悩むほど、他の人が寄ってきてくれるなら悩みまくった方がいいと思うよ。私みたいなのが寄ってきて、どうしたのっつて声を掛けて

くれるだろうからね」

「お前なら声をかけてくれるだろうけど、恵治みたいに声を掛けない人間だっているだろ」

「そう言う風にタイプ分け出来るなら一定数はそういう人間がいるってことじゃん。大丈夫だって」

笑いながら道の先を見やって、それまで遅らせていた歩調を、またしつかりとした速度へと戻していく。無根拠にも近い言い分で、到底受け入れることは出来ない。むしろ危うささえ感じるので、しつかりとした軌道を歩ませてやらなければと思うくらいだ。

それに、僕が薫に対してどういう影響を及ぼしているのか、そうしたことはうやむやになってしまっている。そのところを訊かなくてはならないので、話の軌道も戻さなくてはならない。

「悩んでる人間が悩まない人間に励まされるってのはわかるけどさ、逆はどうなんだよ。悩まない人間が悩んでる人間に励まされるっていうのは」

「そんなの簡単だよ」そう言って、薫はまた歩みを遅らせた。「私が悩めない分をこの人は悩んでくれるんだな、って思って安心する」

「それって、他人任せって言うことか？」思わず脱力してしまった。

「そういうわけじゃないよ。この人が悩んでるなら安心だな、って思ってるんだよ。私は悩みとかよくわからないから、ちゃんと悩める人はうらやましいと思ってるよ。尊敬してる。スポーツ選手とかに對してもそう思うじゃん。速い球を投げる人もいれば、上手くドリブル出

来る人もいる。人間には色々な才能があるんだな、ってことを分かってくれる。悩めない分を悩んでくれる、っていうのは、そういうことなんだよ」

論理が全くつながりあっていないので、一度つかみかけたかと思えた話が、手からすり抜けてしまったのを感じた。薫は変わらずにかみ続けているという手ごたえを感じているようで、話はまだまだ終わっていないのだが、最早ともに聞いていられない。道の先と、僕の方を交互に見るので、置き去りにしようとは思っていないらしいのだが、話の方に工夫がないので、あそこにゴールがあるよ、と目標だけを示されて過程を教えてくれないようなものだ。いつも通りの話しぶりだ。

おざなりに話を聞いていると気付いたのか、横で溜息が聞えた。

「喋ってない時のカズミはちゃんとこういうことわかっているのに、喋ると途端にわからないって言い出すよね」

そうは言われても、自分自身を自分で捉える事が出来ないのは、今日哲治と話して痛いほどわかった。ある程度他人に教えてもらわないといけない部分があるわけで、だからこそ薫を頼ったのではあるが、その教えを理解するには、もう少し時間があるようだ。

「まあ、時間をかけてわかっていくよ」

ならよし、と言って薫はまたしつかりとした足取りになる。気付けば駅へと向かう坂道へと差し掛かっていた。光と言えは駅の明かりだけになってしまい、目の先には暗闇に包まれていても凹凸がわかるほ

どの険しい山肌が立ちはだかっている。

駅の入口にたどりつくくと、薫がにわかには振り返った。つられて後ろを向くと、町のあちこちから放たれる光が、ぼんやりとした膜のような小さな塊となり、向こうに面する山を仄かに白く染めていた。薫はしばらくそちらの方を見つめている。駅の明かりに照らされて、青いジャケットと白いトップスがそれぞれの輪郭をしっかりと分けていた。

こういう時は何かを言うわけでもない。後々になって絵として残すというわけでもなく、ただただ景色を見ているだけなのだ。こちらの出来ることと言えば、黙って動き出すのを待つだけである。手持無沙汰になったので、野田さんの家がどのあたりにあるのか、薫を横目で見るのを忘れないように探っていた。そうして一分も経たなかっただろうか、まもなくうなずいたかと思うと、行こうか、と言ってまた構内に向かって歩き始めたので、ゆっくりと後を追った。